

# 修理田遺跡

福岡県筑紫野市大字二日市字修理田所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

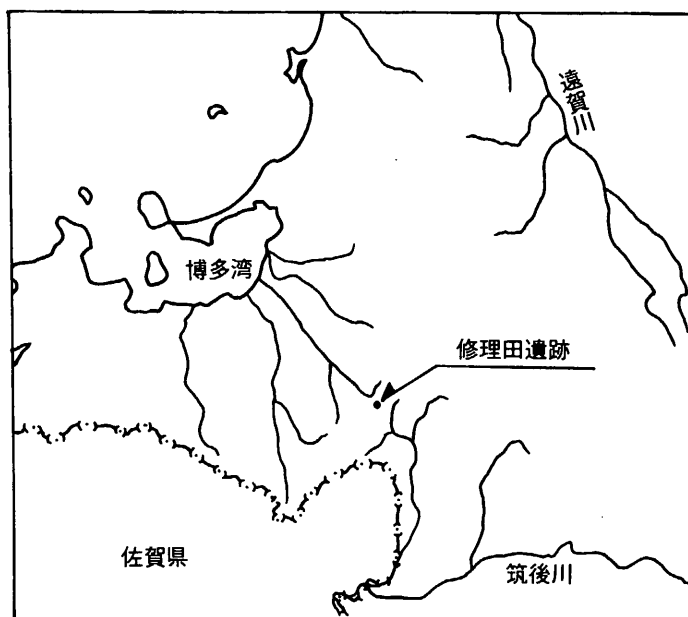
第 5 集

1980

筑紫野市教育委員会

# 修理田遺跡

福岡県筑紫野市大字二日市字修理田所在遺跡の調査



# 序

修理田遺跡の発掘調査は、昭和48年2月より3月にかけて筑紫野市が国、県補助金を受けて実施したもので、当時、本市在住であった別府大学文学部助教授小田富士雄先生（現在、北九州市立歴史博物館主幹）や別府大学文学部考古学研究室の学生諸氏の協力を得て調査を無事終了しました。

本市も、市制施行直後で市内の各所に開発の波がおしよせ、遺跡の発掘も年をおって増え、報告も延び延びとなり、今回報告書を発刊するはこびとなりました。

本書が筑紫野市の文化や歴史に対する理解の一助として、多くの方々に学習や研究の参考にご利用していただくことを願いたします。

最後に、遺跡の調査から整理に至るまで、精力的に参加された青柳栄一氏に対し厚くお礼を申し上げます。

昭和55年12月15日

筑紫野市教育委員会  
教育長 萩尾 利弘

## 例 言

1. この報告書は、筑紫野市教育委員会が昭和47年度、国・県の補助を受けて実施した福岡県筑紫野市大字二日市に所在する修理田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は別府大学文学部考古学研究室の協力を得て、筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 遺物の整理・報告は筑紫野市教育委員会が行なった。
4. 本書の執筆はⅠ～Ⅲ<sub>1</sub>を山野洋一が、Ⅲ<sub>2</sub>～Ⅳを奥村俊久が担当した。
5. 本書の編集は山野洋一が担当し、奥村俊久が協力した。

## 本文目次

|              | 頁  |
|--------------|----|
| I 調査にいたる経過   | 1  |
| II 位置と環境     | 2  |
| III 調査の内容    | 4  |
| 1. 調査概要      | 4  |
| 2. 木棺墓       | 4  |
| 3. 甕棺墓       | 9  |
| 4. 甕棺        | 19 |
| 5. その他の遺構、遺物 | 29 |
| IV まとめ       | 31 |

## 図版目次

|       |                       |
|-------|-----------------------|
| 図版 1  | (1)遺跡の遠景(東より)         |
|       | (2)遺跡の全景(西より)         |
| 図版 2  | 23・5・8・24・25号甕棺墓      |
| 図版 3  | 2・17・29・20号甕棺墓        |
| 図版 4  | 10・15・28・6号甕棺墓・12号木棺墓 |
| 図版 5  | 12・16・21・18号甕棺墓       |
| 図版 6  | 7・1・6・2号木棺墓           |
| 図版 7  | 修理田遺跡出土甕棺(1)          |
| 図版 8  | 修理田遺跡出土甕棺(2)          |
| 図版 9  | 修理田遺跡出土甕棺(3)          |
| 図版 10 | 修理田遺跡出土甕棺(4)          |

## 挿図目次

|                      | 頁    |
|----------------------|------|
| 第1図 修理田遺跡周辺弥生時代遺跡位置図 | 3    |
| 第2図 修理田遺跡遺構配置図       | 折り込み |

|      |                          |    |
|------|--------------------------|----|
| 第3図  | 第1・2・3号木棺墓実測図            | 5  |
| 第4図  | 第4・6号木棺墓実測図              | 6  |
| 第5図  | 第7・8・9・10号木棺墓実測図         | 7  |
| 第6図  | 第11・12号木棺墓実測図            | 8  |
| 第7図  | 第1・3・6・9・11・13・14号甕棺墓実測図 | 10 |
| 第8図  | 第2・4・5・8号甕棺墓実測図          | 11 |
| 第9図  | 第10・15・18・19号甕棺墓実測図      | 12 |
| 第10図 | 第12・16・21・28号甕棺墓実測図      | 14 |
| 第11図 | 第17・23・24号甕棺墓実測図         | 15 |
| 第12図 | 第20・25・29号甕棺墓実測図         | 16 |
| 第13図 | 第22・26・27号甕棺墓実測図         | 17 |
| 第14図 | 修理田遺跡出土甕棺の法量             | 19 |
| 第15図 | 甕棺復原長                    | 19 |
| 第16図 | 成人用甕棺Ⅰ類実測図               | 20 |
| 第17図 | 成人用甕棺Ⅱ類実測図               | 21 |
| 第18図 | 成人用甕棺Ⅲ類実測図               | 22 |
| 第19図 | 成人用甕棺Ⅳ類実測図               | 23 |
| 第20図 | 小児用甕棺Ⅰ・Ⅱ類実測図             | 24 |
| 第21図 | 小児用甕棺Ⅲ類実測図               | 25 |
| 第22図 | 小児用甕棺Ⅳ類実測図               | 26 |
| 第23図 | 小児用甕棺Ⅳ類実測図               | 27 |
| 第24図 | 小児用甕棺Ⅴ類実測図               | 28 |
| 第25図 | 第5号土壙・第7号甕棺墓実測図          | 29 |
| 第26図 | 第13号土壙実測図                | 29 |
| 第27図 | 第13号土壙出土須恵器実測図           | 29 |
| 第28図 | 甕棺墓・木棺墓主軸方位図             | 31 |
| 第29図 | 修理田遺跡時期別遺構配置図            | 32 |

## 表 目 次

|                   |    |
|-------------------|----|
|                   | 頁  |
| 表1 修理田遺跡木棺墓一覧     | 30 |
| 表2 修理田遺跡出土甕棺一覧    | 30 |
| 表3 修理田遺跡出土甕棺時期区分表 | 31 |

# I 調査にいたる経過

修理田遺跡周辺は、戦後間もなく、地下げや開墾により甕棺片の発見があり、さらに昭和45年遺跡西側の地下げによって甕棺（成人用甕棺1基、小児用甕棺3基）が発見されたことにより本遺跡の存在が明確となった。そこで、福岡県教育委員会と筑紫野町教育委員会（現在は市）とで遺跡の保護について協議を行った結果、遺跡周辺地域の宅地化が急速に進展しつつあることから、本遺跡の現地における保存も危ぶまれるので筑紫野市教育委員会が昭和47年度の国庫補助事業として、別府大学文学部助教授小田富士雄氏（現在、北九州市立歴史博物館主幹）、朝倉高校教諭高山明氏（現在、福岡県教育百年史編さん事務局）、および別府大学文学部考古学研究室の協力を受け昭和48年2月4日から同年3月23日までの間に発掘調査を実施した。調査関係者は次のとおりである。

## 総括

|        |       |
|--------|-------|
| 教 育 長  | 西 勉   |
| 社会教育課長 | 武藤・久雄 |

## 庶務

|         |       |
|---------|-------|
| 社会教育係長  | 笠 武人  |
| 社会教育課主事 | 山野 洋一 |

## 発掘調査

|         |       |
|---------|-------|
| 別府大学助教授 | 小田富士雄 |
| 朝倉高校教諭  | 高山 明  |
| 社会教育課主事 | 山野 洋一 |

## 発掘調査補助員

小方泰宏・原田保則・森永弘太・藤田和夫・倉原謙治（以上、別府大学文学部考古学研究室）、佐藤保雄（福岡大学郷土史部）

## 現場作業員

前田等・末次重忠・園田辰雄・波多江よし子・高橋フジ子・柿原シゲ子・倉永カツ子・波多江篤松・笠義幸・萩尾カツエ・奥村俊久・萩尾憲治

なお、学生の宿舎として協力していただいた、山野一雄氏ご一家に、ここに記して感謝する次第である。

## Ⅱ 位置と環境 (第1図)

修理田遺跡は福岡県筑紫野市大字二日市字修理田392番地に所在する弥生時代の甕棺墓を主体とする遺跡である。

筑紫野市は福岡平野の南に筑紫平野へ扇状に展開する狭長な平野を有し、両平野を潤す河川の分水嶺となっている。市の東北部には三郡山塊がせまり、これより派出する山稜は大きく開析され、いくつかの丘陵を形成する。この丘陵上には、本遺跡のほか峰畑遺跡(2)、江戸時代に甕棺墓から銅剣、銅鏡が出土したことで知られる峰遺跡(1)、二日市中学校校庭遺跡(4)、五穀神山遺跡(5)、野黒坂遺跡(8)、峠山遺跡(13)、74基の甕棺が出土した太宰府町吉ヶ浦遺跡(10)などがある。また平野部を挟み対面する天拝山麓には鉄戈が副葬された甕棺など112基の甕棺墓が検出された道場山遺跡(27・28)、甕棺墓53基、土壌墓4基が検出された永岡甕棺遺跡(15)、常松遺跡(17)などがあり、周辺丘陵上のほとんどの弥生時代の遺跡が認められる。

修理田遺跡の北側は極端に傾斜し、現在の水田面より約12mの比高を測る。南側はゆるやかに傾斜し、市立二日市中学校のグラウンドへ下るが、以前は湿地であったといわれる。

遺跡周辺の丘陵上は戦後開拓団等による開墾、削平を受け、また近年宅地化が急速に進み、現在では丘陵本来の姿を知ることはむずかしい。

註1 「太宰府付近における弥生式系統遺跡調査」 中山平次郎 考古学雑誌第20巻第6号昭和5年6月 「鉾之記」 鹿島九平次

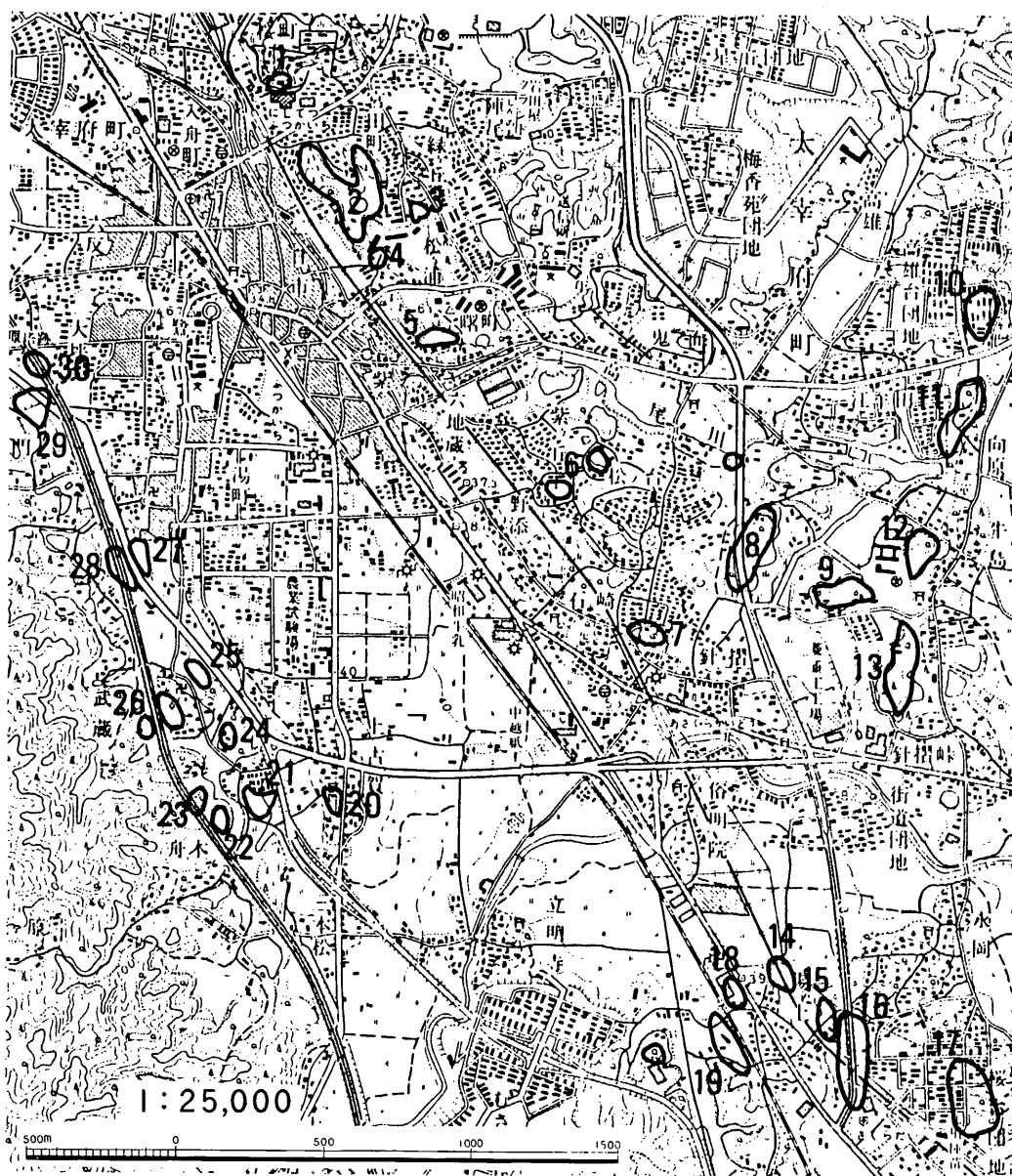
註2 福岡県遺跡等分布地図(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編)1980 福岡県教育委員会

註3 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第25集 1978 福岡県教育委員会

註4 福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集 第5集 1976・1977 福岡県教育委員会  
なお、1980年筑紫野市教育委員会が主体となり、前回調査区域の北側を発掘調査をした。

註5 福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡報告書 1970 別府大学文学部考古学研究報告書1





第1図 修理田遺跡周辺弥生時代遺跡位置図 (縮尺1/25,000)

- ①峯遺跡 ②峯畑遺跡 ③修理田遺跡 ④二日市中学校校庭遺跡 ⑤五穀神山遺跡 ⑥カケ塚遺跡 ⑦針摺(下石仏)遺跡 ⑧野黒坂遺跡 ⑨イカリノ上遺跡 ⑩吉ヶ浦遺跡 ⑪高雄遺跡 ⑫上ノ浦遺跡 ⑬久保山(峠山)遺跡 ⑭竹敷町遺跡 ⑮永岡甕棺遺跡 ⑯永岡遺跡 ⑰常松遺跡 ⑱ヤクルト敷地内遺跡 ⑲大牟田遺跡 ⑳若八幡神社遺跡 ㉑太刀町遺跡 ㉒山の口遺跡 ㉓畑添1地点 ㉔鷺田山遺跡 ㉕原口遺跡 ㉖八隈遺跡 ㉗道場山1地点 ㉘道場山2地点 ㉙大門遺跡 ㉚桶田山遺跡

## Ⅲ 調査の内容

### 1 調査概要（第2図）

修理田遺跡は、東西に延びる狭長な丘陵の脈上にあり、北側は水田面より約12mの比高を測り南側はゆるやかに傾斜する。まず、2月4日、11日、2回に分けて遺跡全体の伐採作業を行い、2月16日、遺跡付近の地形測量（1/200）を実施した。2月19日、遺跡全体に1辺5mの方眼を組み東より西へA→E、北から南へ1→4の記号を付し、東西25m、南北18mの割付を終了し、2月21日より北東・北西隅より掘りはじめた。その結果、遺構は北側、南東隅部には存在せず、北東から南西へ調査区を斜めに横切る形で甕棺墓・木棺墓が集中することが判明した。このことは、遺跡周辺の地形より丘陵の尾根線の南側に尾根と平行して標高49～50mの等高線上に帯状に墓地が営まれたことを示す。また、出土遺物として、調査後発見された1基を加え合計30基の甕棺墓と12基の木棺墓、2基の土壙が検出された。その詳細について、以下に記す。

### 2 木 棺 墓

#### 第1号木棺墓（第3図 図版6）

4号甕棺墓の北側に位置し、著しい削平を受ける。墓壙底には東、西壁にそって木口板のための掘り込みをつくる。また中央部は浅く窪む。

#### 第2号木棺墓（第3図 図版6）

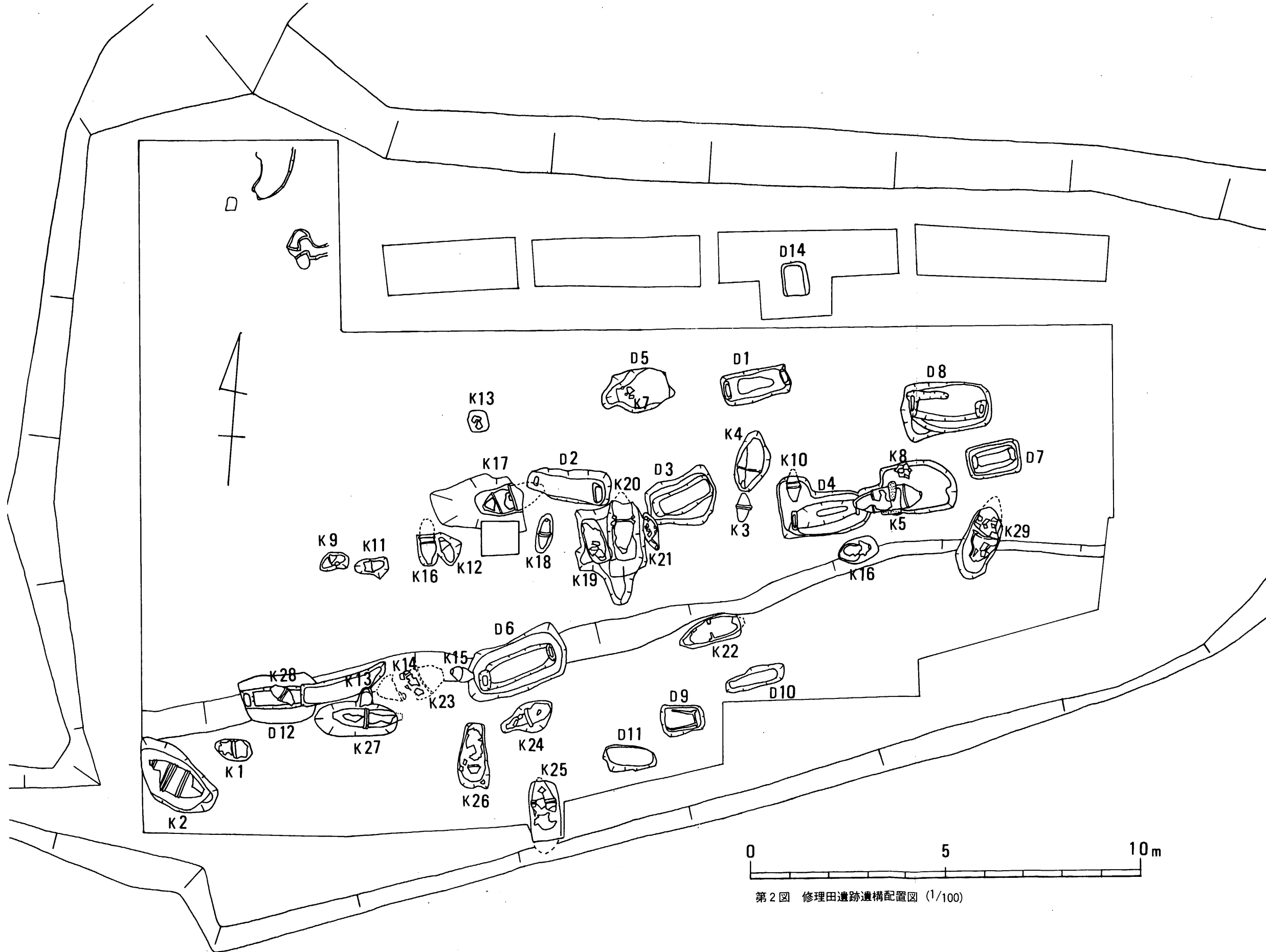
17号甕棺墓の東側に位置し、著しい削平を受ける。墓壙底の棺設置後更に裏込めが行われたものと思われる。木口板は東、西壁からやや間隔をもって設置されている。

#### 第3号木棺墓（第3図）

第2号木棺墓の東に位置する。削平を受け墓壙は明瞭さを欠く。底には木口板、側板などを据え付けるための掘り込みは見られないが、壁が直に立ち上ることから、地山を2段に掘り、箱形に組み合わす棺を設置した木棺墓と考えることができる。

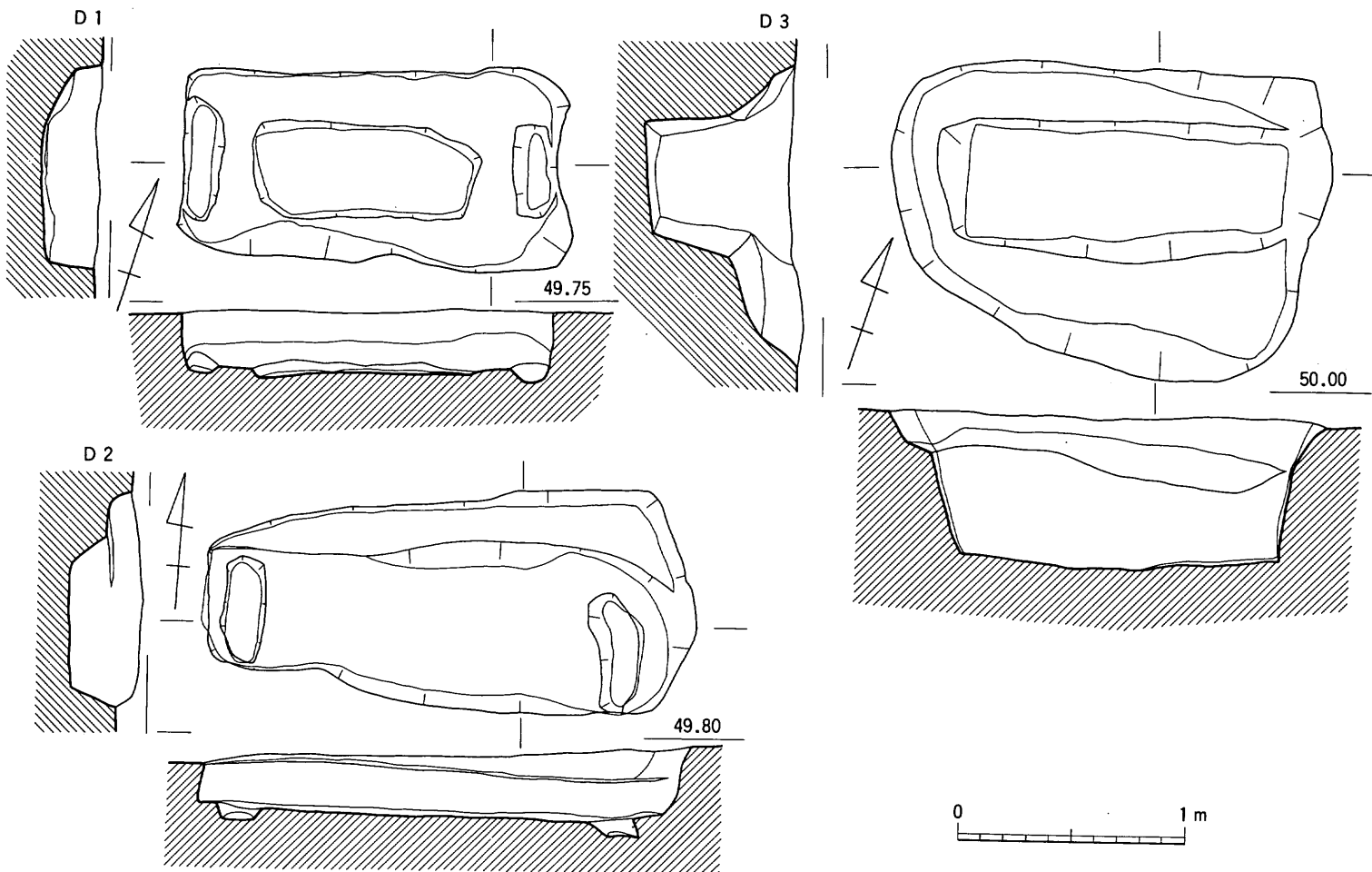
#### 第4号木棺墓（第4図）

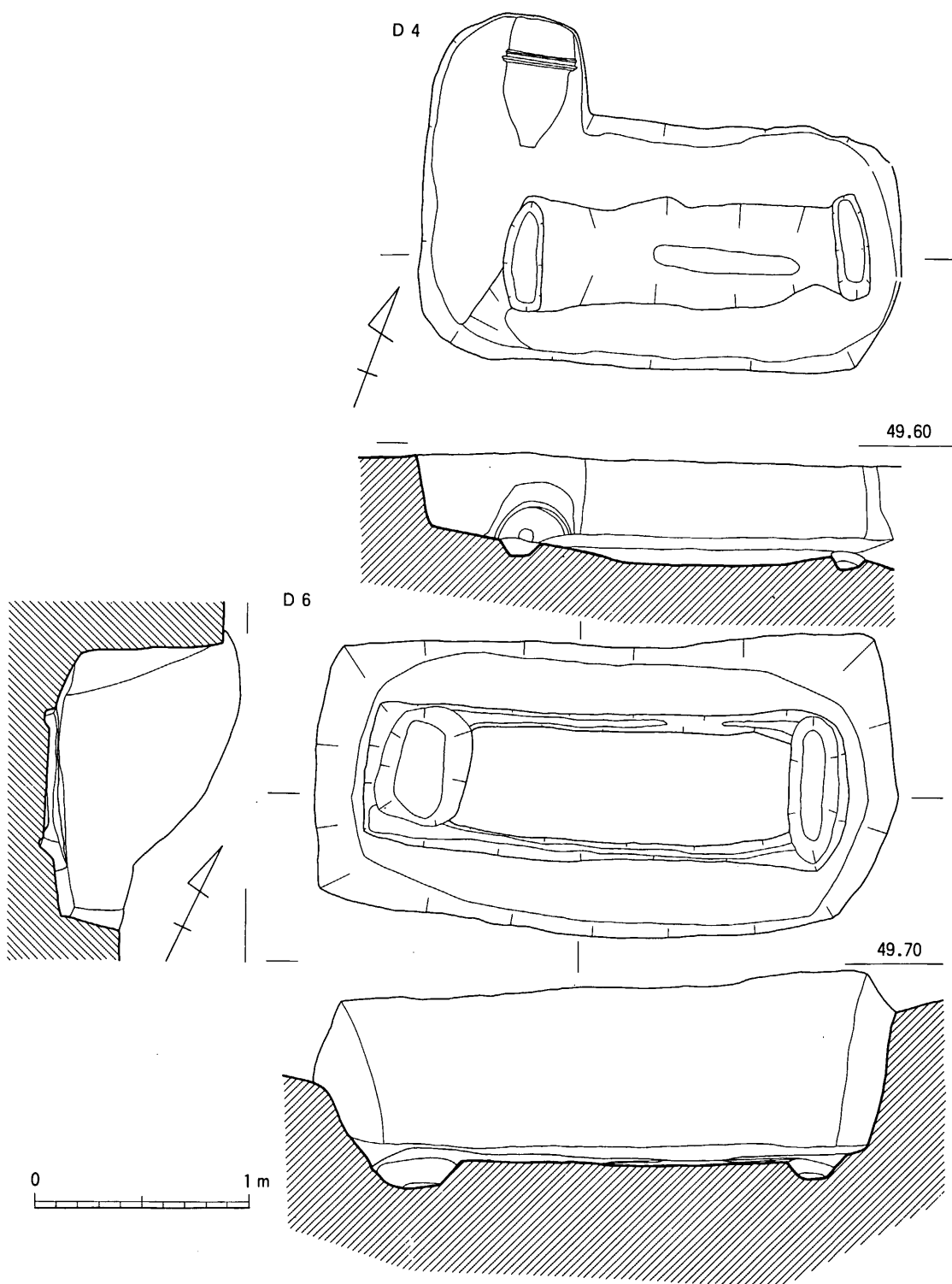
5号・10号甕棺墓により、東壁・北壁を切られる。墓壙は隅丸方形を呈し、木口には浅い掘



第2図 修理田遺跡遺構配置図 (1/100)

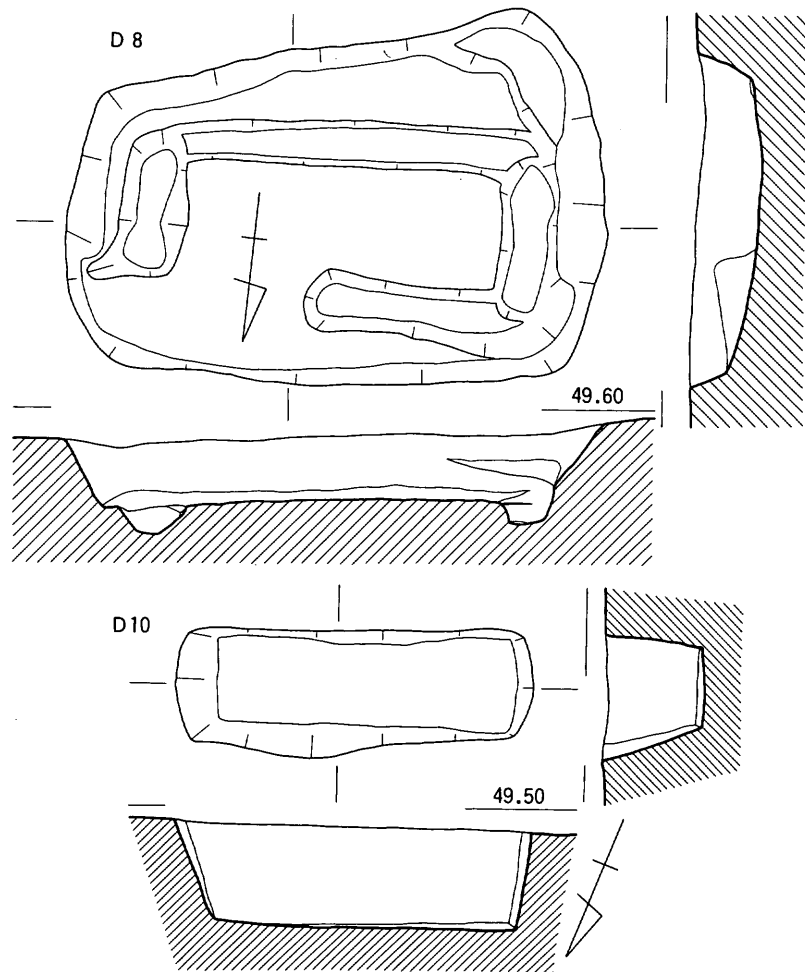
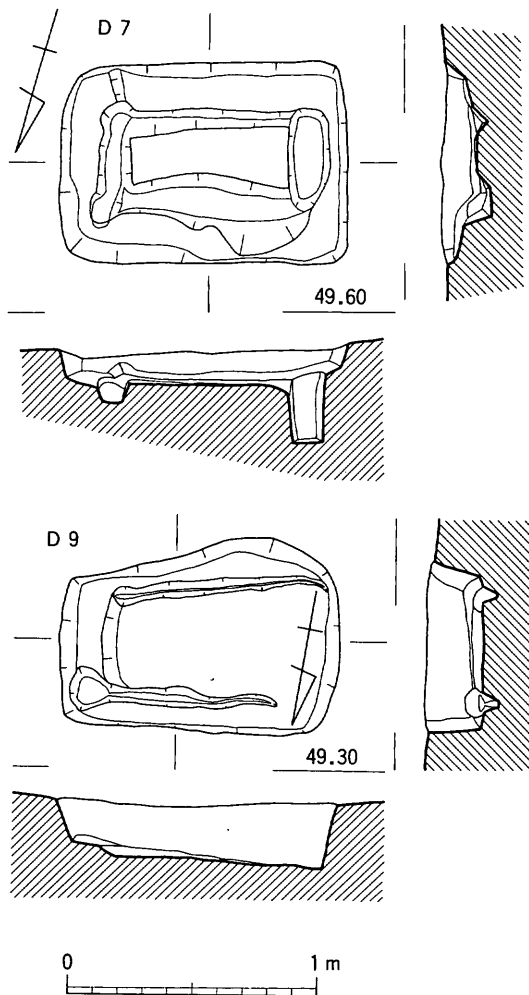
第3図 第1・2・3号木棺墓実測図 (縮尺1/30)





第4図 第4・6号木棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）

第5図 第7・8・9・10号木棺墓実測図 (縮尺1/30)



り込みを有す。棺設置部はやや窪み、設置後に裏込めが行われたものである。

#### 第6号木棺墓（第4図 図版6）

15号甕棺墓によって西壁を切られる。墓域は方形を呈し、木口板、側板を据え付けるための掘り込みを有す。棺の組み合わせは両側板で木口板を挟み、棺設置後裏込めするものである。

#### 第7号木棺墓（第5図 図版6）

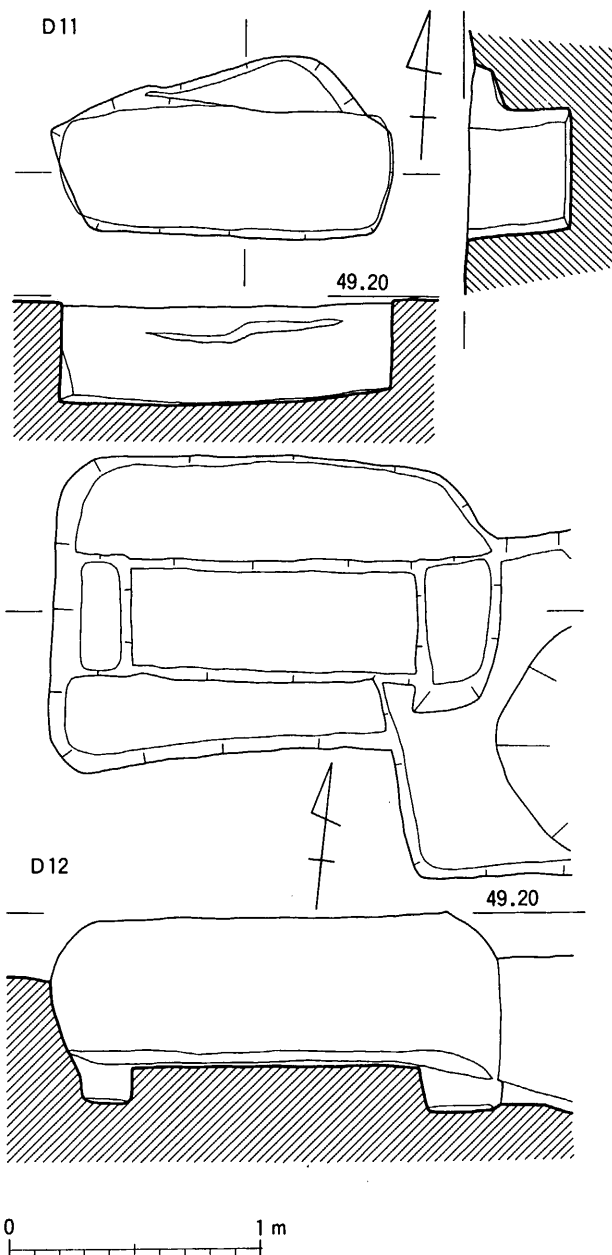
調査区の東端、8号木棺墓の南側に位置する。大きく削平され墓域は不明瞭であるが、墓域底には木口板と側板を据え付けるための掘り込みを有す。棺の組み合わせは木口板で両側板を挟み込むものと思われ、棺設置後裏込する小児用木棺墓である。

#### 第8号木棺墓（第5図）

7号木棺墓の北側に位置し、大きく削平され、墓域は不明瞭である。墓域底には木口板と側板を据え付けるための掘り込みがあるが、側板の掘り込みは浅く、北側は半分程度しか確認されなかった。棺の組み合わせは両側板で木口板を挟み込むものと思われ、棺設置後裏込めするものである。

#### 第9号木棺墓（第5図）

削平を受け墓域は不明瞭である。墓域底には側板を据え付けるための掘り込みが認められる。



第6図 第11・12木棺墓実測図（縮尺1/30）

#### 第10号木棺墓（第5図）

9号木棺墓の北東側に位置する。壁の上半はすでに削平を受けているが、残存部は直に立ち上ることから箱形に組み合わせ棺をもつ木棺墓と考えられる。

#### 第11号木棺墓（第6図）

9号木棺墓の南西側に位置する。壁の上半はすでに削平されているが、残存部は直に立ち上ることから箱形に組み合わせ棺をもつ木棺墓と考えられる。

#### 第12号木棺墓（第6図 図版12）

27号甕棺墓に東壁を切られ、直上に28号甕棺が埋置されていた。墓壙は隅丸方形を呈し、棺設置部は1段掘り下げられる。東西端には木口板を据え付けるための掘り込みを有し、棺設置後裏込めするものである。

### 3 甕 棺 墓

#### 第1号甕棺墓（第7図）

削平を受け墓壙、甕棺上半分は破壊されている。主軸方位はN-17°5'-Wを示し、ほぼ水平に埋置されたものと思われる。甕棺は接口式の小児用甕棺で、上甕に比べ下甕の方が大形のものを用いている。

#### 第2号甕棺墓（第8図 図版3）

調査区の西端に位置する。墓壙上部は削平を受けているが、現況では不整楕円形を呈す2段掘りである。更に西壁に横穴を穿ち下甕の下半分を挿入するが、この部分は反対方向からの盗掘にあい欠失する。主軸方位はN-21°-Wを示し、3°の傾斜をもって埋置された接口式の成人用甕棺墓である。なお、下甕には外から内へ穿孔がされている。

#### 第3号甕棺墓（第7図）

4号甕棺の南横に位置する接口式の小児用甕棺墓である。墓壙上部は削平を受け甕棺墓の下部しか残存しないが、主軸方位はN-4°-Eを示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。

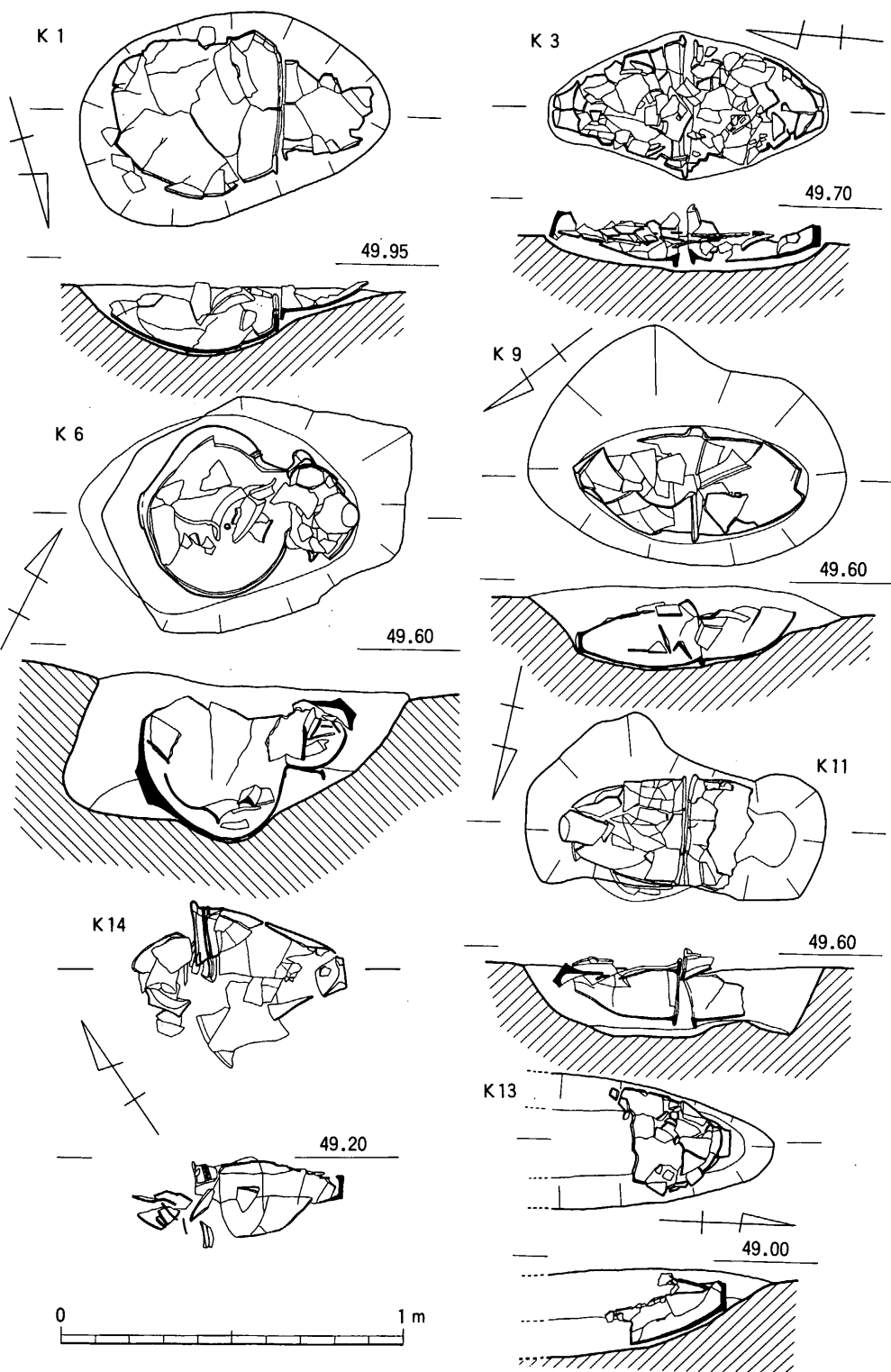
#### 第4号甕棺墓（第8図）

墓壙は削平を受け甕棺の下半分しか残存しない。主軸方位はN-11°-Eを示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。甕棺は上甕に傘蓋、下甕に甕を用いた接口式の成人用甕棺墓である。

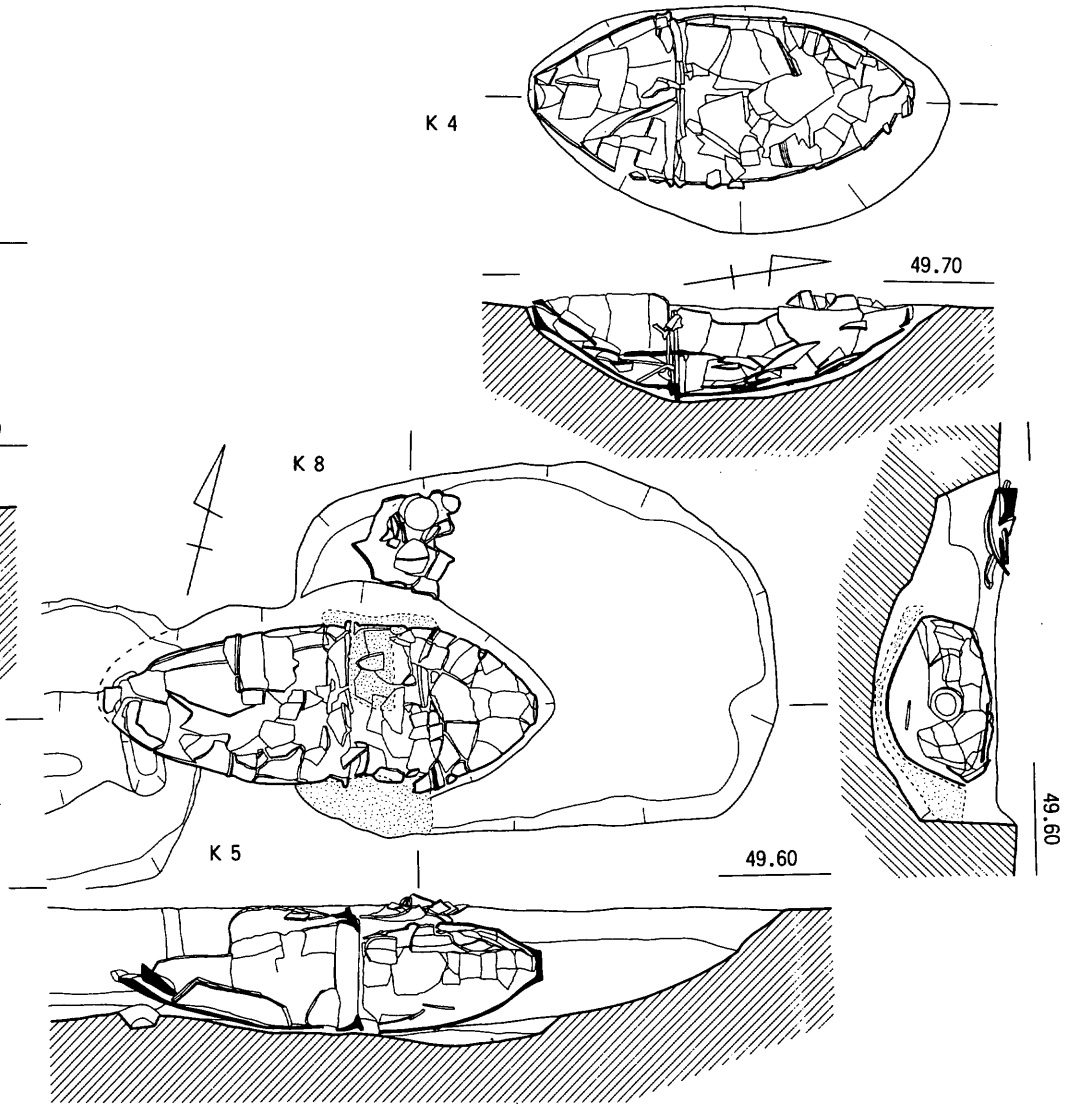
#### 第5号甕棺墓（第8図 図版2）

調査区の東側に位置し、4号木棺墓の東側を切って埋置された成人用甕棺墓である。更に墓

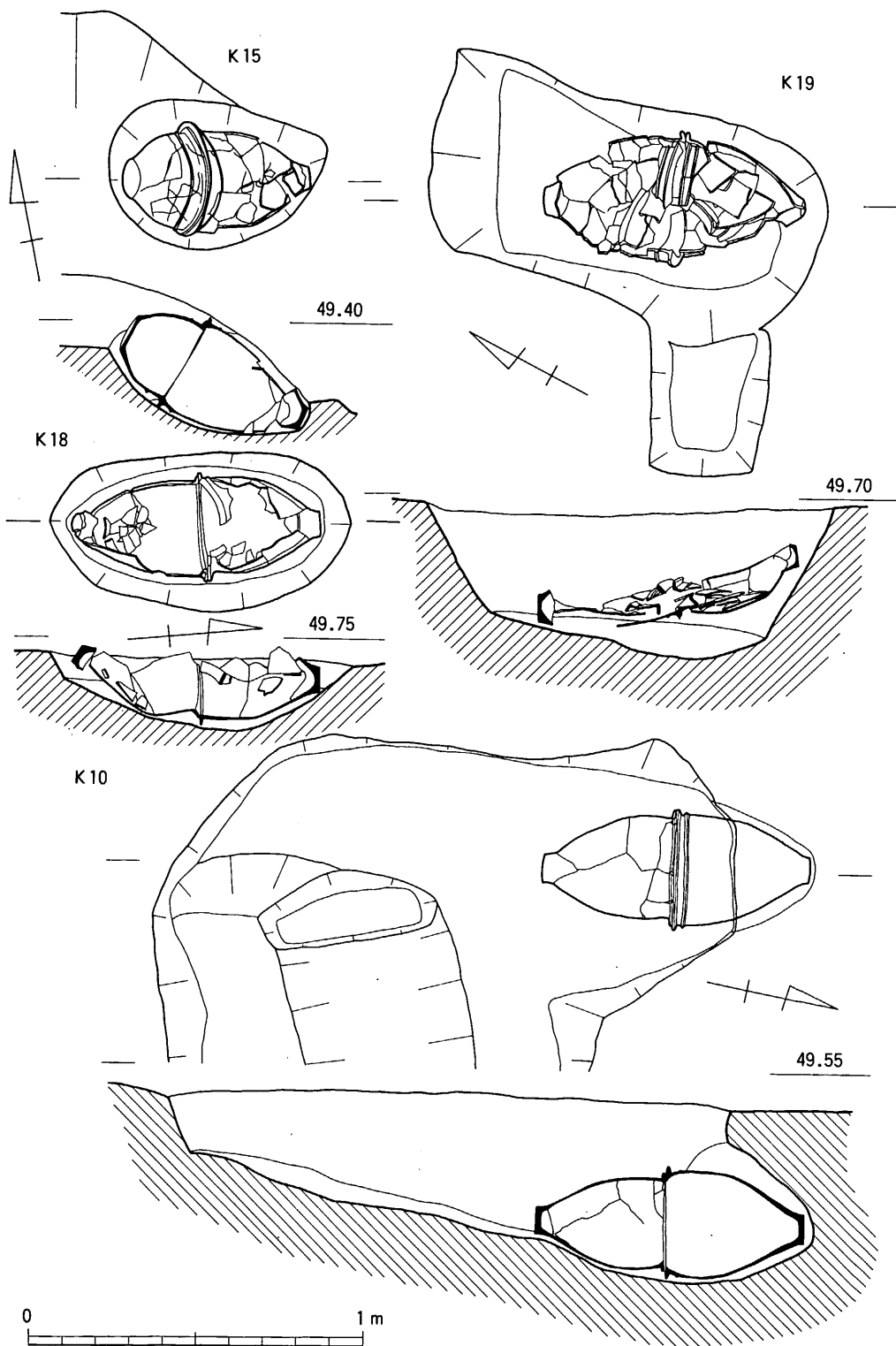




第7図 第1・3・6・9・11・13・14号壟墓実測図 (縮尺1/20)



第8图 第2·4·5·8号墓棺室实测图 (缩尺1/30)



第9図 第10・15・18・19号甕棺墓実測図（縮尺 $1/20$ ）

墳内北側には、8号甕棺がかなり浮いた所から検出された。墓壇はいちぢるしく削平されているが、不整形プランを呈し、更に西側に横穴を穿ち下甕の咥ほどを挿入する。主軸方位はN-75°-Eを示し、ほぼ水平に埋置されている。合わせの方法は接口式で、淡黄色の粘土で接口部を目づめしている。

#### 第6号甕棺墓（第7図 図版4）

5号甕棺の南横に位置するもので、上・下甕はともに壺形土器を用いた小児用甕棺墓である。墓壇は削平を受けているが、現況では不整形を呈す。主軸方位はN-64°5'-Eを示し、21°の傾斜で埋置されている。上甕は下甕に比べてかなり小形のものをを用いており、胴部中央まで下甕の口縁内に収まる呑口式の合わせ方となっている。下甕は胴部に穿孔され、この部分を下にして、やや掘り窪められた墓壇底部に埋置されている。

#### 第7号甕棺墓（第25図）

5号土壇を切って埋置されていた小児用甕棺墓である。削平を著しく受け甕棺の大部分は欠失するが、肩部に2条の凸帯を有する壺形土器であることは確認された。

#### 第8号甕棺墓（第8図 図版2）

5号甕棺墓土壇内のかかなり浮いた所より検出された。成人用甕棺の底部と小形の甕形土器上半部の破片が集積された状態で出土したものであり、甕棺墓としては疑問の余地があるが、一応以下甕棺墓としてあつかう。また、5号甕棺との関係は出土位置が浅いこともあり明確にできなかった。

#### 第9号甕棺墓（第7図）

墓壇は削平を受け不明である。主軸方位はN-37°5'-Eを示し、やや傾斜して埋置された接口式の小児用甕棺墓である。

#### 第10号甕棺墓（第9図 図版4）

4号木棺墓の西側を切って埋置された接口式の小児用甕棺墓である。墓壇はほぼ方形を呈すものと思われ、更に北側に横穴を穿ち下甕の下半を挿入する。主軸方位はN-11°-Wを示し、ほぼ水平に埋置される。

#### 第11号甕棺墓（第7図）

削平を受け墓壇は不明であり、更に西側は後世の攪乱を受け、甕の下半を欠失する。主軸方位をN-78°-Eにとる接口式の小児用甕棺墓である。

#### 第12号甕棺墓（第10図 図版5）

16号甕棺を切って埋置された接口式の小児用甕棺である。主軸方位はN-35°-Wを示し、水平に埋置される。

#### 第13号甕棺墓（第7図）

27号甕棺墓の上位にある小児用甕棺墓であるが、27号甕棺がつぶれた際に一部は下へ落ち込

んでおり、更に後世削平を受け大破している。主軸方位は $N-2^{\circ}-W$ を示す。

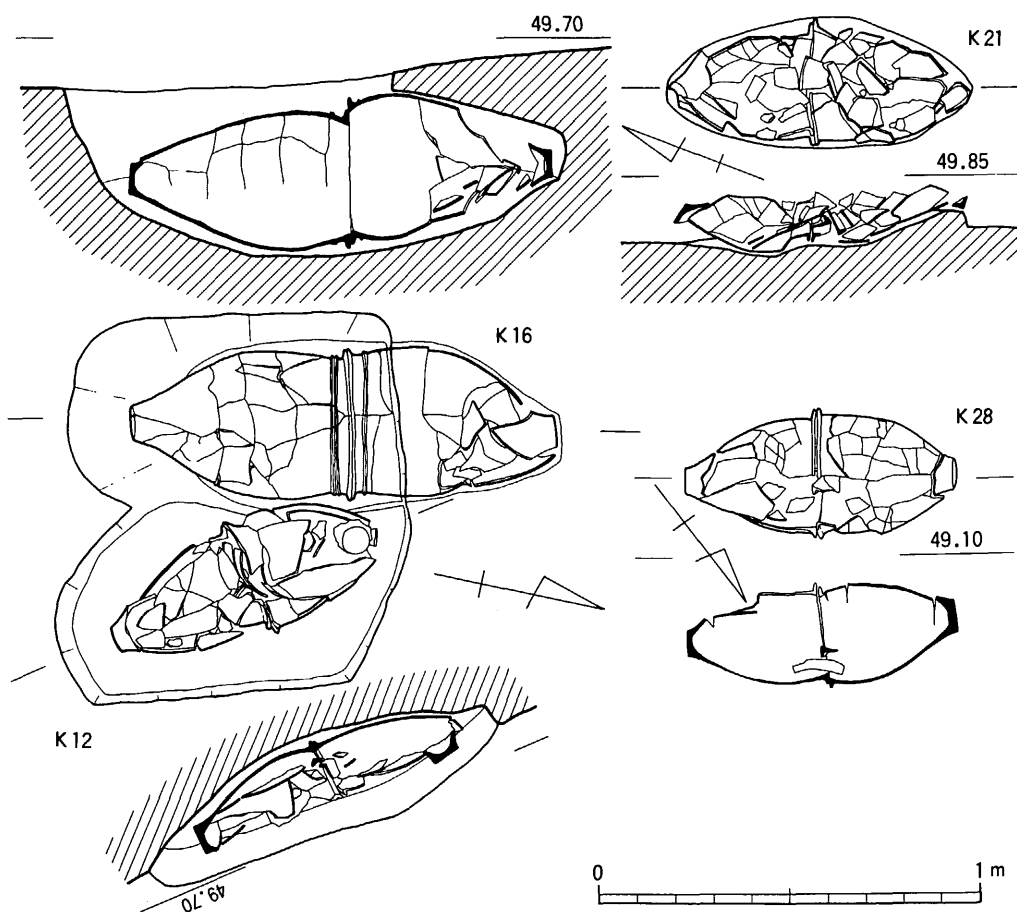
#### 第14号甕棺墓（第7図）

23号甕棺墓の上位にある小児用甕棺墓であるが、23号甕棺がつぶれた際に一部は下へ落ち込んでおり、また墓壇は埋位が浅いこともあり、確認できなかった。甕棺は主軸方位がほぼ $N-56^{\circ}-W$ を示す接口式の甕棺である。

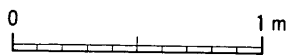
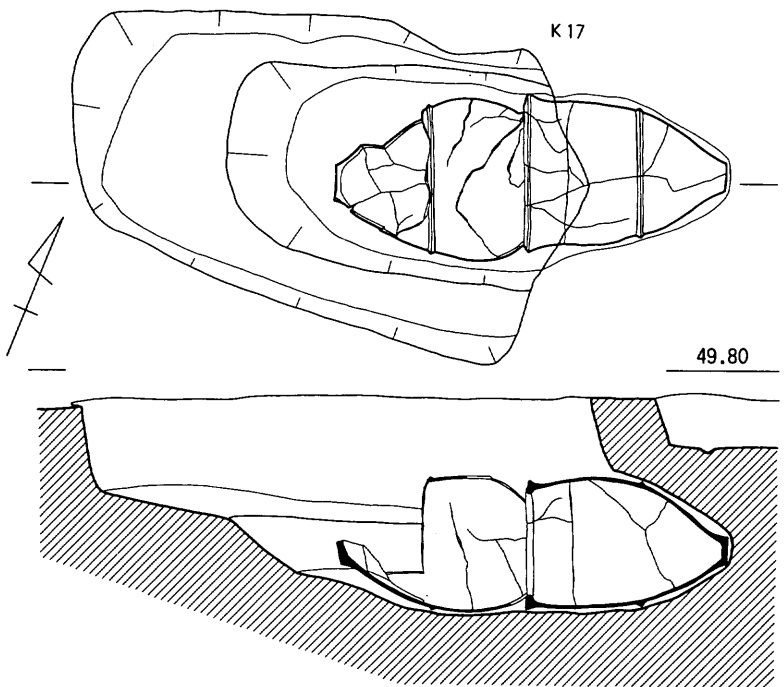
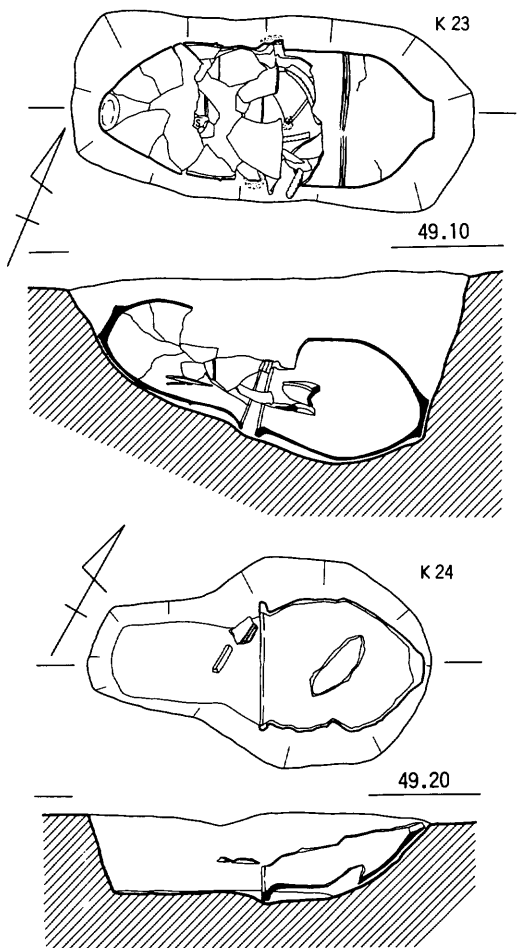
#### 第15号甕棺墓（第9図 図版4）

6号木棺墓の西側を切って埋置された接口式の小児用甕棺墓である。削平を受け墓壇はかなり破壊されていたが、下甕の底部は僅かに挿入された部分が残っており、本来は下甕のかかなりの部分が挿入されていたものと思われる。主軸方位は $N-79^{\circ}-W$ を示し、 $26^{\circ}$ の傾斜をもって埋置されたものである。

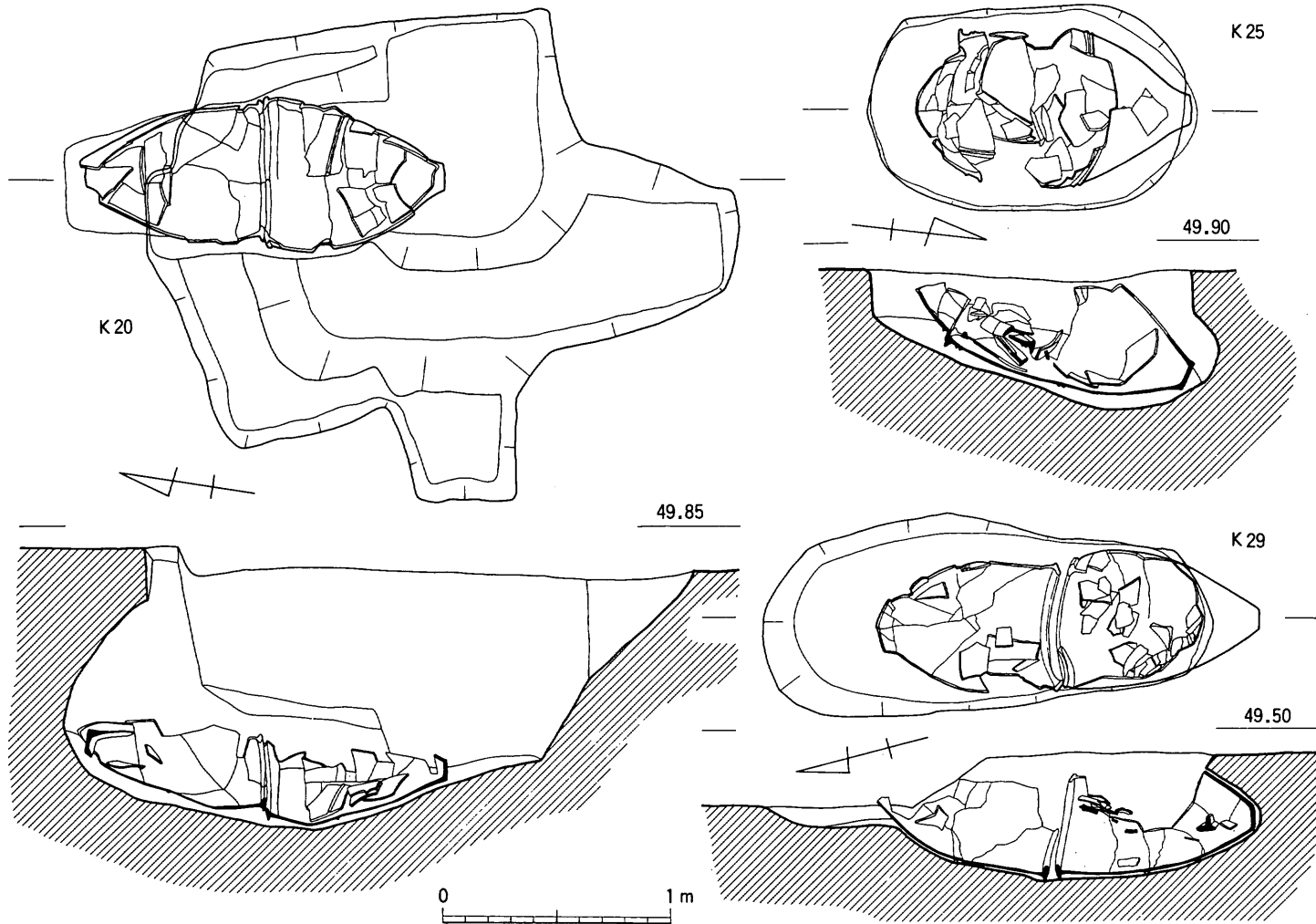
#### 第16号甕棺墓（第10図 図版5）



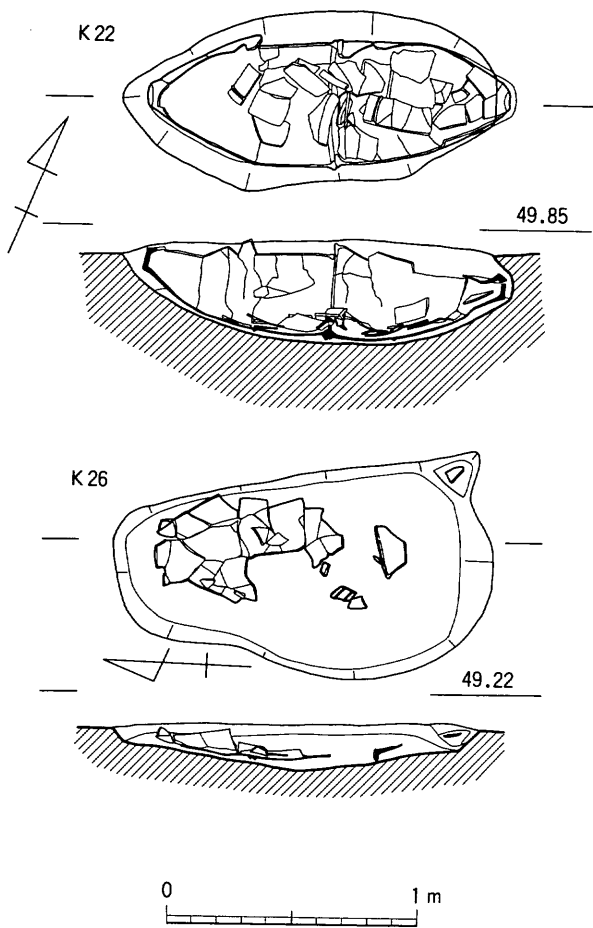
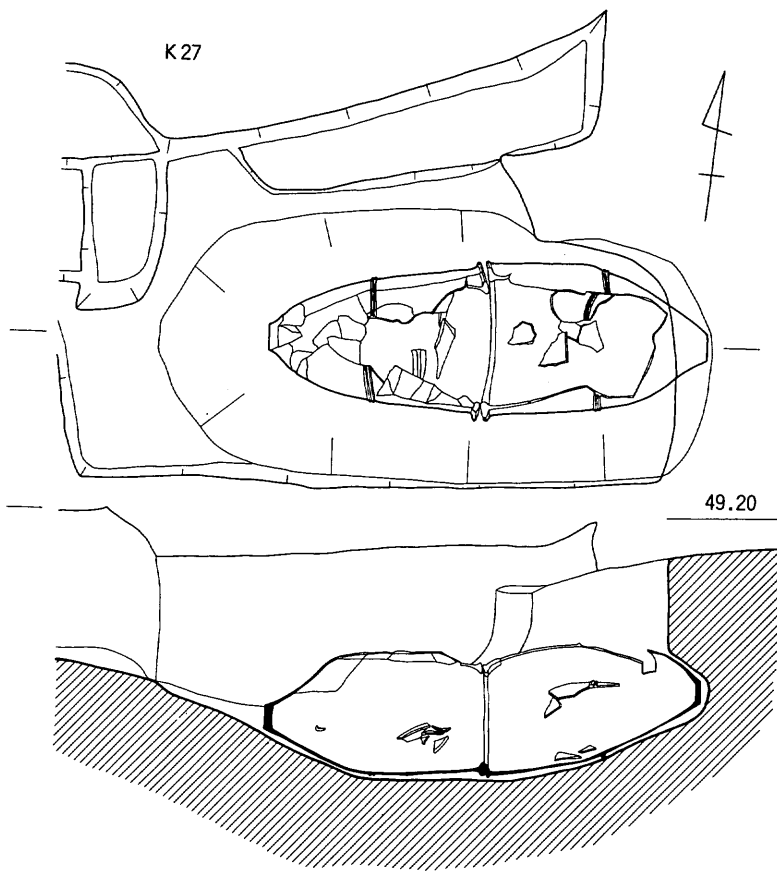
第10図 第12・16・21・28号甕棺墓実測図（縮尺 $1/20$ ）



第11図 第17・23・24号竈形墓実測図 (縮尺1/30)



第12図 第20・25・29号甕棺墓実測図 (縮尺1/30)



第13図 第22・26・27号墓実測図 (縮尺1/30)



12号甕棺墓に東側を切られた接口式の小児用甕棺墓である。墓域は隅丸方形を呈し、北壁に横穴を穿ち下甕の大半を挿入する。主軸方位は $N-12^{\circ}-W$ を示し、ほぼ水平に埋置される。

#### 第17号甕棺墓（第11図 図版3）

墓域は不整長方形を呈す2段掘りであり、更に東壁に横穴を穿ち下甕の大半を挿入する。

主軸方位は $N-68^{\circ}-E$ を示し、ほぼ水平に埋置される成人用甕棺墓である。合わせ口の方法は接口式であるが、口径の関係から僅かに上甕を下甕が覆い気味となる。

#### 第18号甕棺墓（第9図 図版5）

削平を受け甕棺の上半部は欠失する。主軸方位を $N-5^{\circ}-E$ にとり、ほぼ水平に埋置された接口式の小児用甕棺墓である。

#### 第19号甕棺墓（第9図）

20号甕棺墓の西側を切って埋置される接口式の小児用甕棺墓である。墓域は不整隅丸長方形を有し、断面は逆台形状を呈す。主軸方位は $N-27^{\circ}5'-W$ を示し、 $15^{\circ}$ 程度の傾斜で埋置される。

#### 第20号甕棺墓（第12図 図版3）

墓域西側は19号甕棺墓により切られ不明瞭となっているが、本来は方形を呈した2段掘りの墓域と思われる。また北壁は大きく掘り窪められ、ここに下甕の下半を挿入する。主軸方向は $N-9^{\circ}-W$ を示し、ほぼ水平に埋置された成人用甕棺墓である。

#### 第21号甕棺墓（第10図 図版5）

20号甕棺の東横に位置する接口式の小児用甕棺墓である。浅い位置に埋置されていたため、削平を受け、墓域に密着した部分のみが残っていた。主軸方位は $N-9^{\circ}-W$ を示し、ほぼ水平に埋置されていたものと思われる。

#### 第22号甕棺墓（第13図）

削平を受け墓域は明瞭ではないが、下甕底部は僅かに挿入された部分が残っており、本来は下甕のかなりの部分が挿入されていたものと思われる。主軸方位は $N-67^{\circ}-E$ を示し、 $4^{\circ}$ の傾斜をもって埋置された成人用甕棺墓である。

#### 第23号甕棺墓（第11図 図版2）

墓域は隅丸長方形を呈し、必要最小限度の空間である。主軸方位は $N-68^{\circ}-E$ を示し、墓域にそい $16^{\circ}$ の傾斜で埋置される接口式の成人用甕棺で、接口部には目ばりの粘土を施す。また棺内には流れ込みか否かは明確ではないが、握りこぶし大の石が検出された。

#### 第24号甕棺墓（第11図 図版2）

墓域は削平を受け明瞭さを欠く。主軸方位は $N-60^{\circ}-E$ を示し、ほぼ水平に埋置されたとと思われる単式の成人用甕棺墓である。甕棺は削平により半分を欠失するが、残存する部分の胴部に柳葉形状の長さ30cm余り、幅10cm程度の穴があり、これは埋置前にあいていたと考えられるが、いわゆる穿孔とは考え難い。

#### 第25号甕棺墓（第12図）

削平を受け墓壙は不明瞭であるが、隅丸長方形、または楕円形を呈すものと思われる。北壁には横穴を穿ち、下甕の底部付近を挿入する。主軸方位は $N-6^{\circ}-W$ を示し $24.5^{\circ}$ の傾斜で埋置される成人用甕棺墓である。下甕は出土甕棺中最も大きく、上甕に傘蓋を用いる。

#### 第26号甕棺墓（第13図）

削平を著しく受け、大半を欠失する成人用甕棺墓である。主軸方位は不明瞭であるが、 $N-2^{\circ}-W$ 程度と思われ、残存する土壙と甕棺の状況からみて、ほぼ水平に埋置されていたものであろう。

#### 第27号甕棺墓（第13図）

第12号木棺墓・第13号甕棺墓を切って埋置された、接口式の成人用甕棺墓である。墓壙は長方形を呈し、北側の隅が丸みを帯びる。東壁は浅い横穴が設けられ下甕の底部を挿入する。主軸方位は $N-84^{\circ}-E$ を示し、 $-4^{\circ}$ の傾斜で埋置している。

#### 第28号甕棺墓（第10図 図版4）

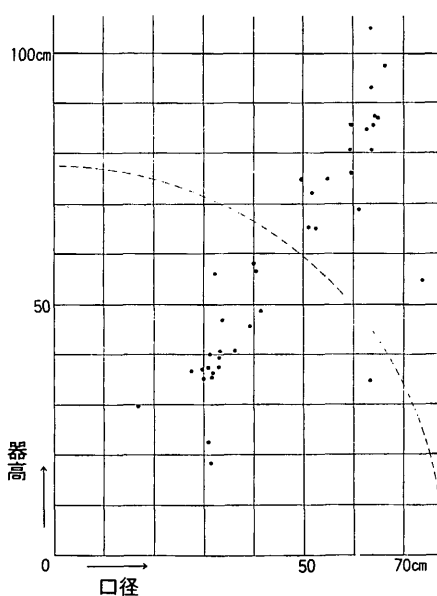
12号木棺墓の上位に埋置された接口式の小児用甕棺墓である。主軸方位は $N-14^{\circ}5'-E$ を示し、 $6^{\circ}$ の傾斜で埋置されるが、墓壙は12号木棺墓と重複しているため確認できなかった。

#### 第29号甕棺墓（第12図 図版3）

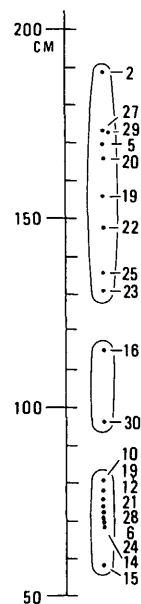
調査区の東端に位置する。墓壙上部は削平を受けているが、現況では楕円形を呈す。南壁に横穴を穿ち、ここに下甕の下半を挿入する。主軸方位は $N-14^{\circ}5'-E$ を示し、約 $3^{\circ}$ の傾斜をもって埋置された接口式の成人用甕棺墓である。

## 4 甕 棺

甕棺は29基57個体が出土し、さらに調査終了後、調査区をやや東にはずれた所から1基2個体が発見された(K30)。甕棺は14図のように法量から2群に分けることができ、成人用と小児用を分ける基準とした。しかし、15図のように合わせの状態では3群に分かれる。上・下のグループについてはいうまでもなく成人用と小児用の甕棺である



第14図 修理田遺跡出土甕棺の法量



第15図 甕棺復原長

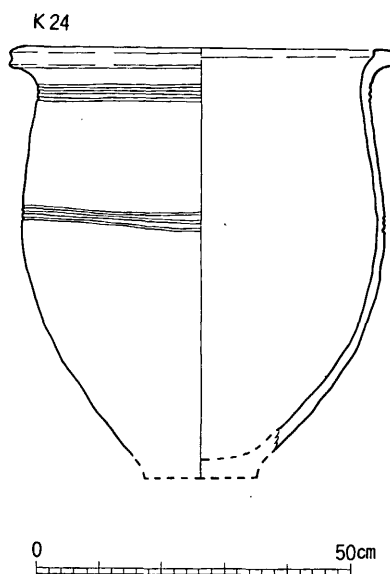
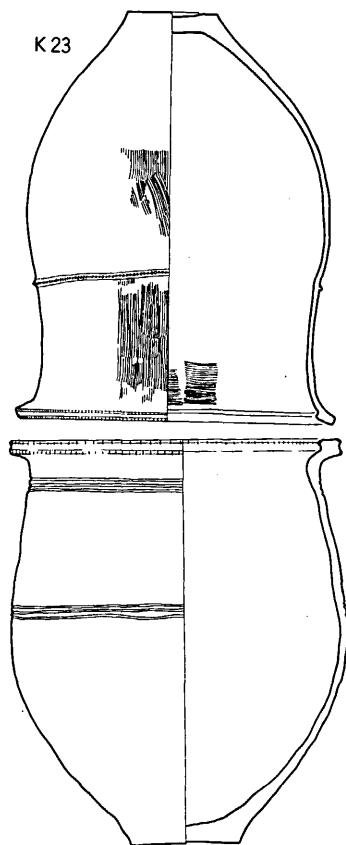
うが、K16・K30はその中間的な大きさを示すものである。一応、本報告では資料が少ないこともあり小児棺としてあつかった。さらに、これらの甕棺を形態により成人用甕棺4類、小児用甕棺5類に分けた。

#### 成人用甕棺Ⅰ類（第16図）

壺から発達した形態的特徴を残すものをあげた。K23上甕は下甕よりやや古い様相を示す。外反する口縁の内側には粘土帯を貼付し、口縁端の上下には刻み目を入れる。頸部は内彎する曲線を示し、肩部に三角凸帯を貼付し刻み目を入れる。底部は大きく、やや上げ底をなす。器壁は分厚く、1.0～1.2cmを測る。外面には縦方向、内面上部には横方向のハケ調整が観察される。K23下甕とK24は、いわゆる金海式甕棺と呼ばれるもので、K24の方がやや大形である。口縁部は大きく開き、上端に粘土帯を貼付し肥厚させる。K23下甕は口縁端の上下、及び内側に刻み目が施されるが、K24では観察されない。胴部は外に張り出す曲線を示し、口縁下と胴部最大径位にそれぞれ3本の沈線がめぐる。器壁は厚く、1.2～1.5cmを測る。調整は全体的にナデが施され、K23下甕に僅かなハケ目が残る。

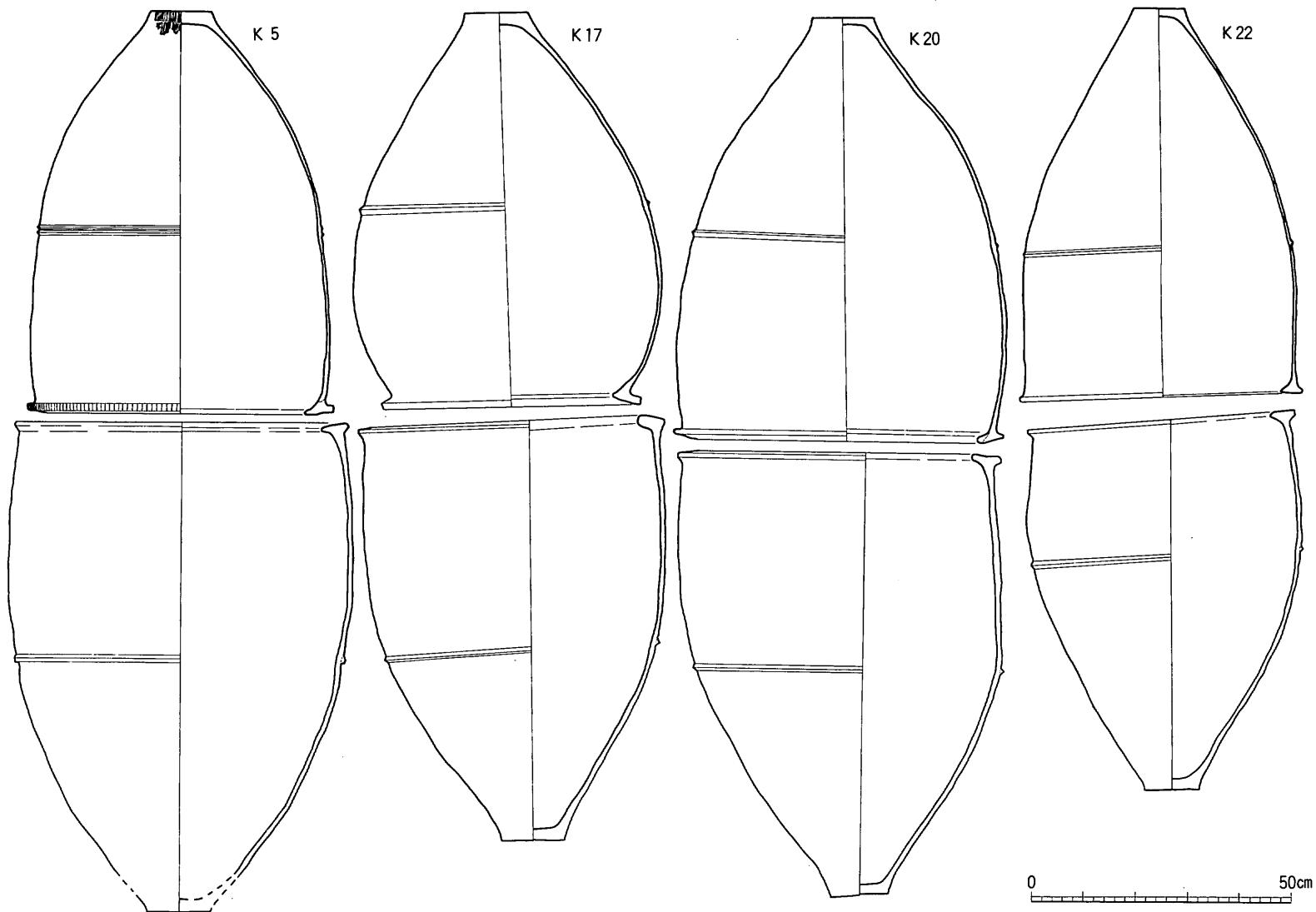
#### 成人用甕棺Ⅱ類（第17図）

口縁部は内側への発達がみられるが、外側へはほとんど発達しない。口縁上面は平坦なもの（K22・K5上甕）、内に傾斜するもの（K5下甕）、外に低く傾斜するもの（K20）があり、K5上甕の口縁外端に細い刻み目を刻す。口縁下はややすぼまり、胴部は僅かに張る。胴部中ほどには1条（K5下甕・K20・K22）、または2条（K5上甕）の凸帯を貼付するが、K5下甕のものは他が断面三角形を示すのに対し、断面台形を呈す。K17は他と形態を異にする。上甕は丸味を帯びた甕棺で、頸部が大きく内傾し、口縁部は内側に傾斜する平坦面をもつ。胴部最大径はやや上半にあり、この位置よりやや下った所に断面三角形の凸帯を1条



第16図 成人用甕棺Ⅰ類実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ ）

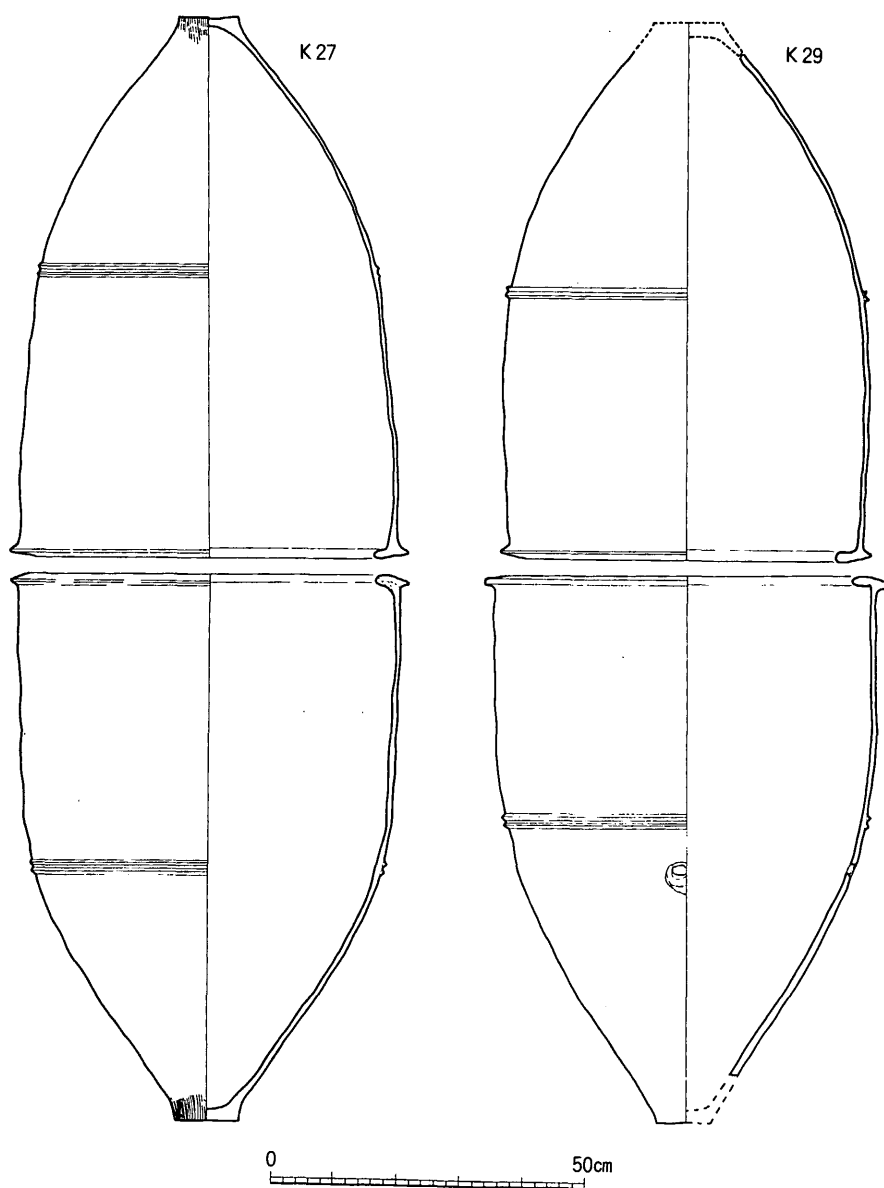
第17図 成人用壺棺工類実測図 (縮尺1/12)



貼付する。下甕の口縁はやや外側に傾斜し、外側にはほとんど発達せずに内側に張り出す。口縁下はややすぼまり、胴部のやや低い位置に断面三角形の凸帯を1条貼付する。また、黒塗りがK17下甕の口縁部上面から内面上部、K17上甕の口縁部内面、K5上甕・K20下甕の口縁上面に残りは悪いながらも観察された。

### 成人用甕棺Ⅲ類（第18図）

口縁部は内側に大きく張り出すが、外への発達は顕著でない。胴部上半は開き気味に立ち、

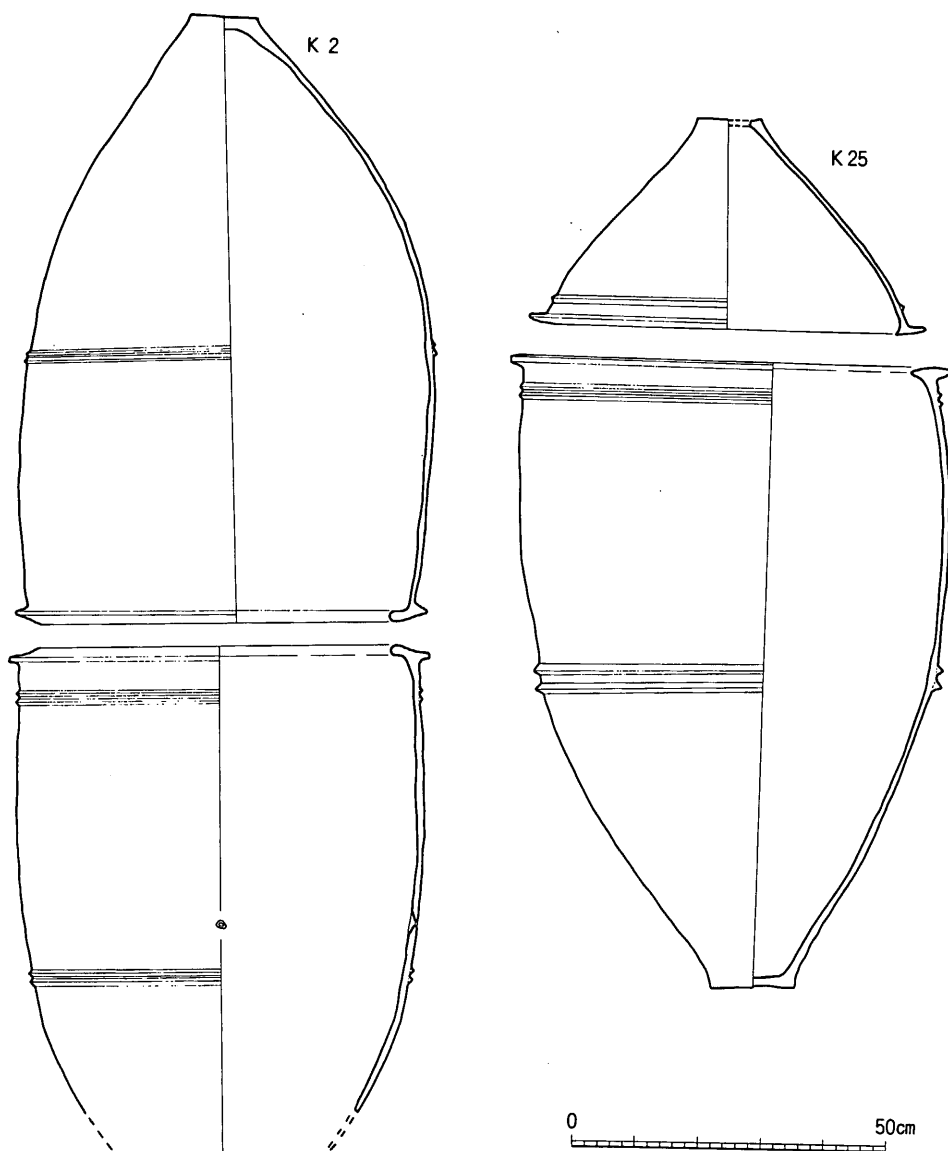


第18図 成人用甕棺Ⅲ類実測図（縮尺 $1/12$ ）

胴部のやや低い位置に2条の断面三角形を呈す凸帯を貼付する。K 29下甕には内から外への穿孔がある。

成人用甕棺Ⅳ類（第19図）

口縁部は外側への発達がみられT字形を呈し、上面を外側に傾斜する。口縁下は僅かにすぼまり、断面三角形の凸帯を2条貼付するが、K 2上甕にはつかない。胴部には2条の断面三角形を呈す凸帯を貼付する。K 4とK 25の上甕には傘蓋が用いられる。K 25上甕の口縁は逆L字形



第19図 成人用甕棺Ⅳ類実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ ）

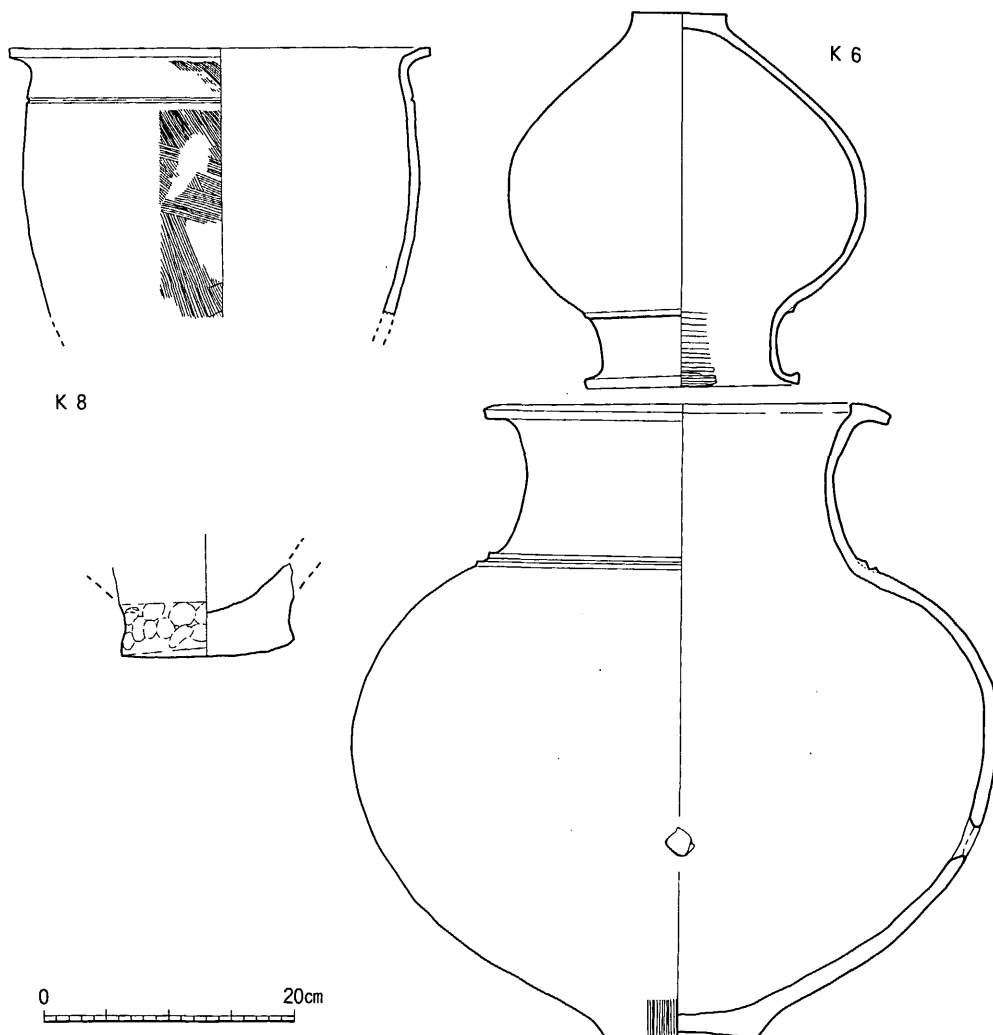
状となるが、内側は断面三角形に突出するもので、上面は外側にやや傾斜する。口縁下には1条の断面三角形を呈す凸帯がめぐる。K 25下甕は本遺跡出土甕棺中最大のもので、胴部の凸帯も太い。また、K 2下甕には外から内への穿孔がある。

#### 小児用甕棺Ⅰ類（第20図K 8）

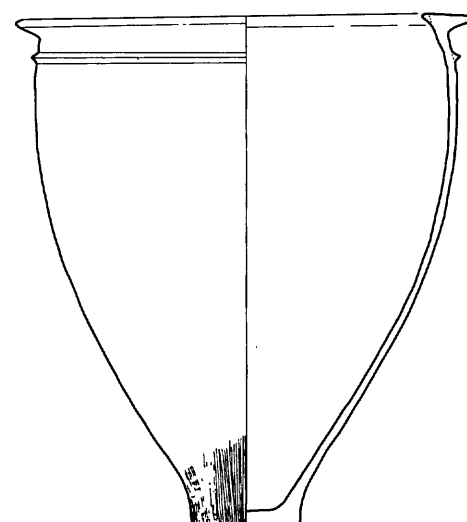
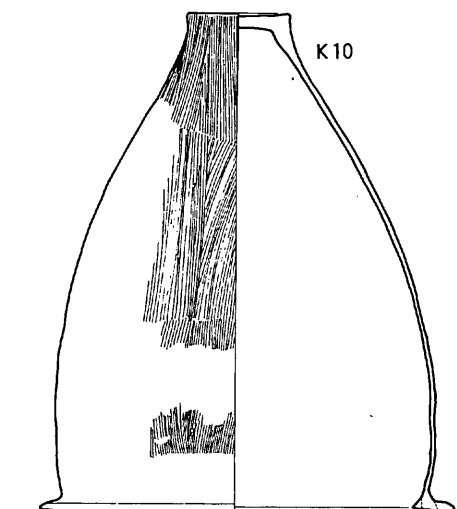
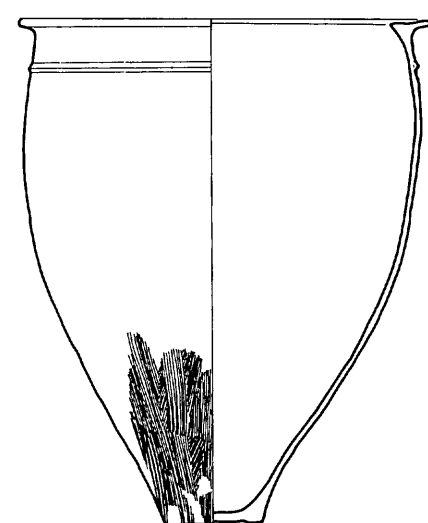
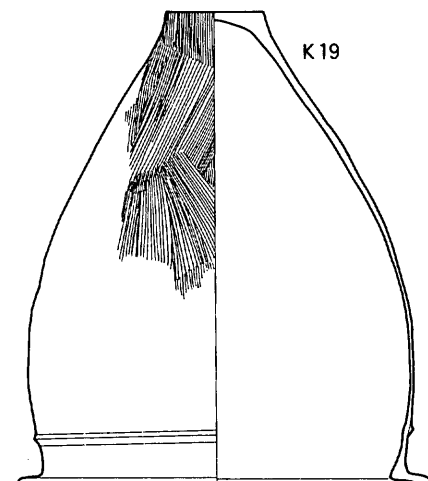
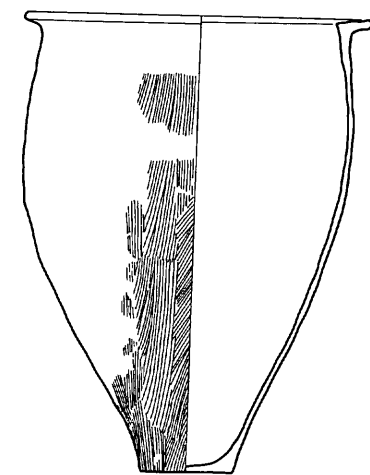
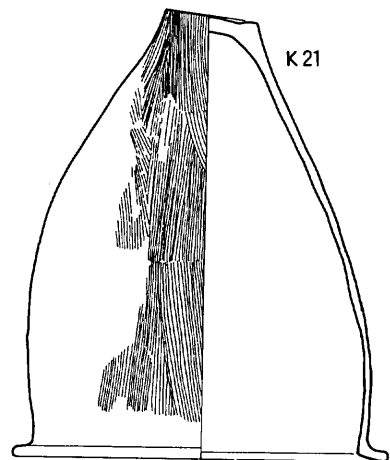
如意形口縁をもつもので、口縁下に1条の沈線がめぐる。器壁外面には口縁直下より、やや斜行するハケ目が施され、ススの付着がみとめられる。またK 8に伴い成人用甕棺Ⅰ類と思われる甕の底部が出土した。この底部は赤褐色を呈し、胎土は粗い。

#### 小児用甕棺Ⅱ類（第20図K 6）

小児用壺棺である。上甕は小形の壺形土器で、口縁端が下方にやや肥厚し、口縁下はすぼまる。肩部には断面三角形の凸帯を1条貼付し、底部はしまる。器壁外面には丹が塗られ、頸部内面は粗いへら磨きが施される。下甕は大形の壺形土器が用いられる。口縁上面は肥厚し、やや

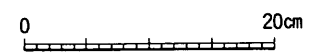
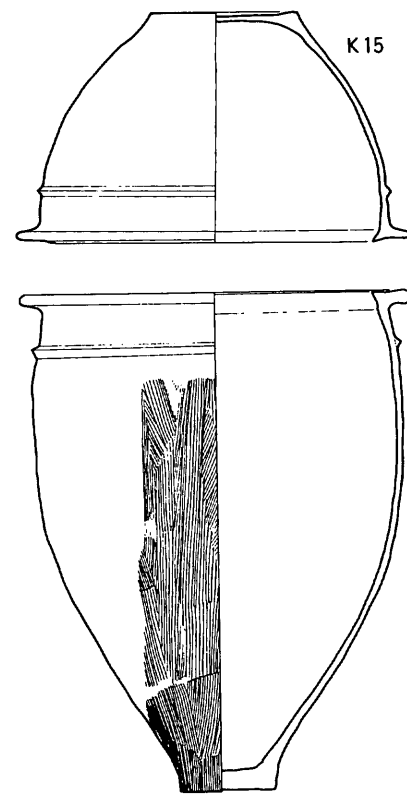
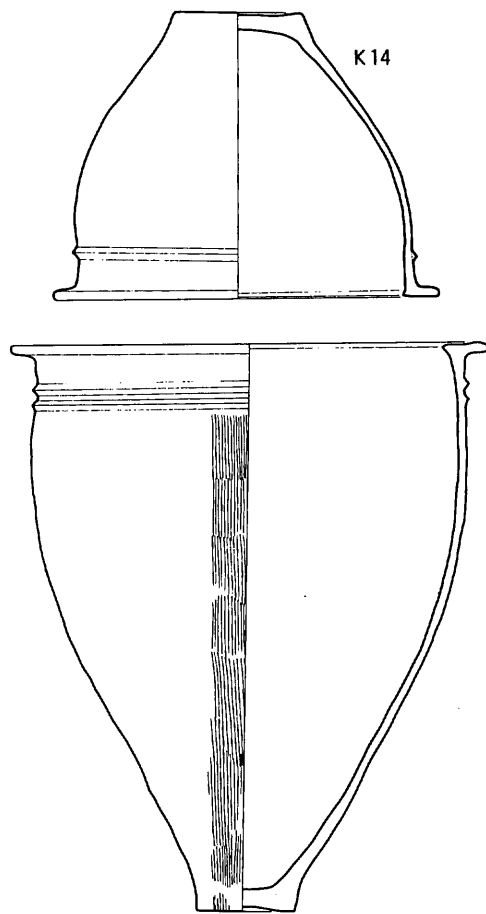
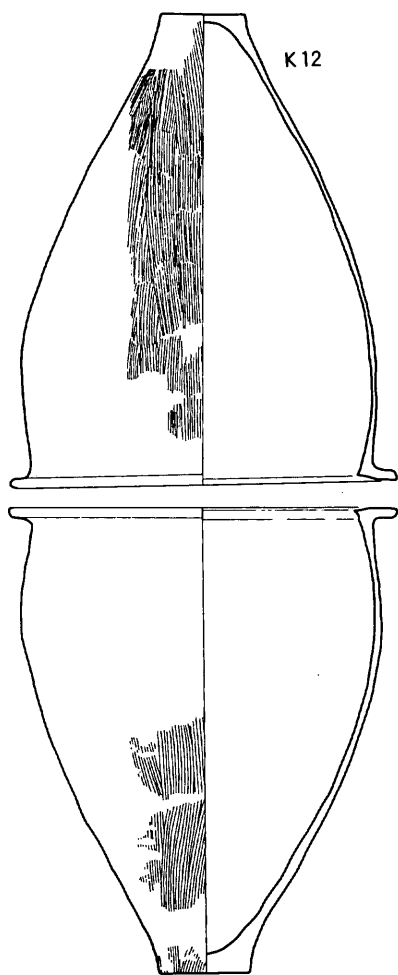


第20図 小児用甕棺Ⅰ・Ⅱ類実測図（縮尺1/6）

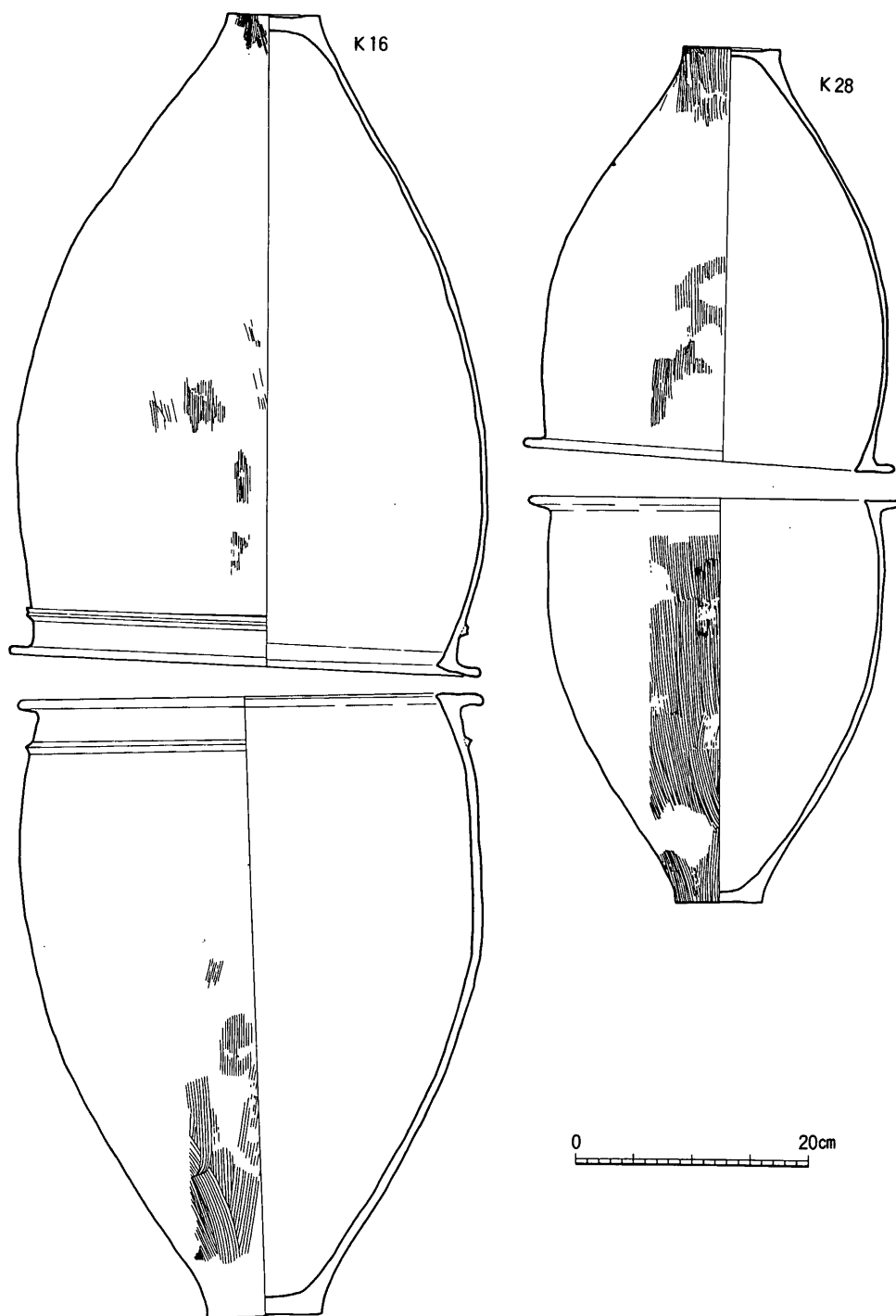


第21図 小児用甕棺Ⅲ類実測図 (縮尺1/6)





第22図 小児用甕棺Ⅳ類実測図 (縮尺1/6)



第23図 小児用甕棺Ⅳ類実測図（縮尺 $\frac{1}{6}$ ）

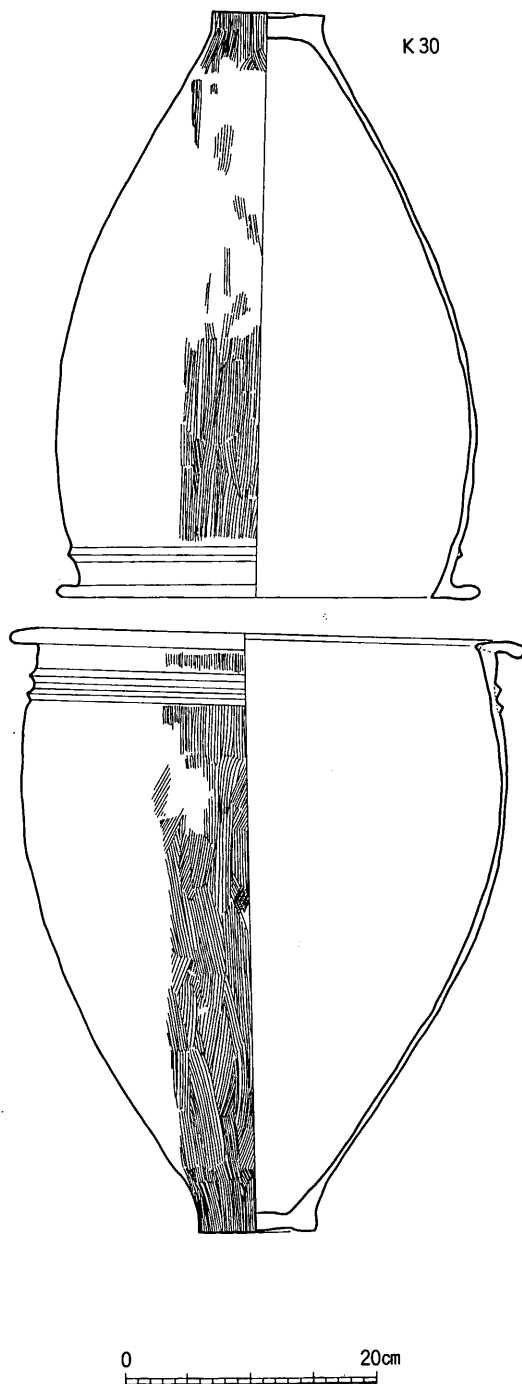
外側に側斜する。肩部には断面三角形の凸帯を2条貼付し、胴部最大径はやや上位にある。また胴部には外から内への穿孔をもつ。

#### 小児用甕棺Ⅲ類（第21図）

口縁はやや内側に傾斜する逆L字状を呈し、胴部最大径を上位にもつものである。K10・19の口縁は内側にやや張り出すが、K21にはみられない。K10下甕・K19には口縁下に断面三角形の凸帯を1条貼付する。底部はいずれも細くしまり、僅かに上げ底を呈す。器壁は薄く、底部でも3～6mmほどである。

#### 小児用甕棺Ⅳ類（第22・23図）

口縁はほぼ平坦な逆L字状を呈し、胴部の張りも弱いものである。K12は口縁内側がやや内傾するもので、底部は平底をなす。K14・15は上甕に鉢を用いる。K14は口縁内側が僅かに突出し、口縁下に断面三角形の凸帯を1条貼付する。底部は僅かに上げ底を呈す。下甕は口縁下に断面三角形の凸帯を1条貼付し、底部はやや上げ底を呈す。K15は口縁部がやや外傾し、口縁下に断面三角形の凸帯を1条貼付する。底部はやや上げ底を呈し、器壁が薄い。下甕は口縁がやや太目で、その下に1条の断面三角形凸帯を貼付し、底部は僅かに上げ底をなす。K16の上甕は内側に傾斜する口縁をもち、口縁下に断面M字形凸帯を1条貼付する。底部は僅かに上げ底をなす。下甕は口縁下に断面三角形の凸帯を1条貼付し、底部は僅かに上げ底を呈す。上・下甕ともに胴部にススの付着があり、日用器からの転用と思



第24図 小児用甕棺Ⅴ類実測図（縮尺1/6）

われる。これらのⅣ類甕棺はⅢ類甕棺に比べ、概して底部は厚手であるが、K 28のように薄いものもある。

#### 小児用甕棺Ⅴ類（第24図）

総じてⅣ類甕棺に類似するが、口縁端部がやや長くなり、下方に傾斜して、新しい様相を感じさせる。口縁下には上甕が1条、下甕が2条の断面三角形凸帯を貼付し、底部はいずれも僅かに上げ底を呈す。

## 5 その他の遺構・遺物

#### 第5号土壌（第25図）

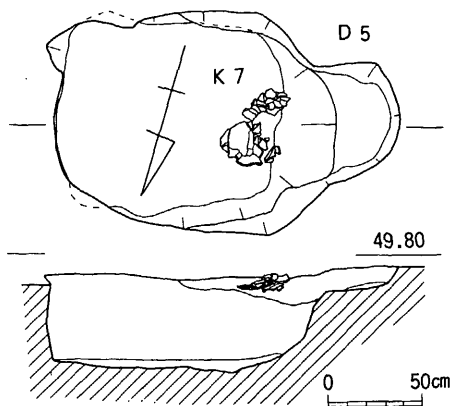
調査区の北側に位置し、上半部は後に埋置された7号甕棺墓と共に削平を受け欠失する。現況では、150×115cmを測る隅丸方形プランを有す。壁は僅かに袋状を呈し、床面は、115×96cmの方形を呈す。

#### 第13号土壌（第26・27図）

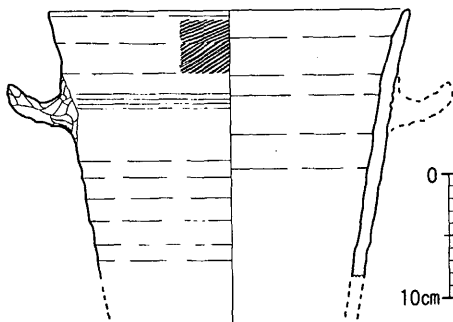
17号甕棺墓の北側に位置する。隅丸方形の平面プランを有すが、上半部は削平を受け欠失する。土壌内からは甕が出土した。甕は須恵器で下半が欠失する。円筒形の土器に1対の把手を貼付したもので、把手の部位に2条の沈線が回る。内・外面ともに横ナデ調整されるが、口縁部外面には2帯のタタキが施される。

#### 第14号土壌

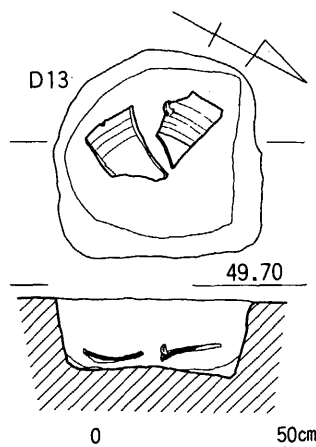
調査区の北側に位置する。方形の平面プランを有すもので、全体的にかなり整った感を受ける。土壌内からは遺物は検出されなかったが、かなり新しい時代のものであろう。



第25図 第5号土壌・第7号甕棺墓実測図（縮尺1/40）



第27図 第13号土壌出土須恵器実測図（縮尺1/6）



第26図 第13号土壌実測図（縮尺1/20）

| 番号 | 方 位     | 墓 域 の 規 模<br>〔長×幅〕 | 棺 の 規 模<br>〔長×幅×深〕 | 掘 込 の 有 無 |     | 備 考                                      |
|----|---------|--------------------|--------------------|-----------|-----|------------------------------------------|
|    |         |                    |                    | 木口板       | 側 板 |                                          |
| 1  | N-72°-E | cm                 | 128×(30)×? cm      | ○         |     | K21より古い<br>K5より古い<br>墓跡かどうか不明<br>K15より古い |
| 2  | N-87°-E |                    | 146×(55)×?         | ○         |     |                                          |
| 3  | N-72°-E | (194×132)          | 140×47×(38)        |           |     |                                          |
| 4  | N-70°-E | (226×115)          | 138×(47)×?         | ○         |     |                                          |
| 5  |         |                    |                    |           |     |                                          |
| 6  | N-65°-E | (273×135)          | 153×51×?           | ○         | ○   |                                          |
| 7  | N-74°-E |                    | 63×18×?            | ○         | ○   |                                          |
| 8  | N-84°-E |                    | 125×40×?           | ○         | ○   |                                          |
| 9  | N-87°-E |                    | 100×35×?           |           | ○   |                                          |
| 10 | N-80°-E |                    | 120×31×?           |           |     |                                          |
| 11 | N-68°-E |                    | 131×48×?           |           |     |                                          |
| 12 | N-86°-E |                    | 115×40×?           | ○         |     |                                          |

表1 修理田遺跡木棺墓一覽

| 番号 | 上 壺 |           |     | 下 壺 |            |     | 対象 | 分類 | 備 考           |
|----|-----|-----------|-----|-----|------------|-----|----|----|---------------|
|    | 器種  | 法量(口径×器高) | 色 調 | 器種  | 法量(口径×器高)  | 色 調 |    |    |               |
| 1  | 甕   |           | 赤褐色 |     |            | 赤褐色 | 小児 | Ⅳ  |               |
| 2  | 甕   | 662×967mm | 淡褐色 | 甕   | 670×約920mm | 黄褐色 | 成人 | Ⅳ  | 下甕に穿孔(外→内)    |
| 3  | 甕   |           | 黄褐色 | 甕   |            |     | 小児 | Ⅳ  |               |
| 4  | 傘蓋  | 736×549   | 暗褐色 | 甕   |            | 黄白色 | 成人 | Ⅳ  |               |
| 5  | 甕   | 595×764   | 赤褐色 | 甕   | 634×933    | 暗褐色 | 成人 | Ⅱ  | D 4 より新しい     |
| 6  | 壺   | 170×298   | 黄褐色 | 壺   | 322×506    | 暗褐色 | 小児 | Ⅱ  | 下甕に穿孔(外→内)    |
| 7  | 壺   |           | 黄褐色 |     |            |     | 小児 |    |               |
| 8  | 壺   |           |     | 甕   | 338× ?     | 淡褐色 | ?  | Ⅰ  | 成人用甕棺底部を伴う    |
| 9  | 甕   | 324×376   |     | 甕   |            | 黄褐色 | 小児 | Ⅳ  |               |
| 10 | 甕   | 331×395   | 淡褐色 | 甕   | 362×407    | 赤褐色 | 小児 | Ⅲ  |               |
| 11 | 甕   |           | 赤褐色 | 甕   | 300×354    | 淡褐色 | 小児 | Ⅳ  |               |
| 12 | 甕   | 310×379   | 赤褐色 | 甕   | 310×375    | 赤褐色 | 小児 | Ⅳ  |               |
| 13 |     |           | 赤褐色 | 甕   |            |     | 小児 | Ⅳ  | K27より古い       |
| 14 | 鉢   | 309×227   | 黄褐色 | 甕   | 382×455    | 黄褐色 | 小児 | Ⅳ  | K23より新しい      |
| 15 | 鉢   | 314×183   | 暗褐色 | 甕   | 313×400    | 赤褐色 | 小児 | Ⅳ  | D 6 より新しい     |
| 16 | 甕   | 404×565   | 淡褐色 | 甕   | 400×583    | 赤褐色 | 小児 | Ⅳ  |               |
| 17 | 甕   | 496×750   | 黄白色 | 甕   | 591×809    | 黄白色 | 成人 | Ⅱ  |               |
| 18 | 甕   |           |     | 甕   |            |     | 成人 |    |               |
| 19 | 甕   | 330×375   | 淡褐色 | 甕   | 330×404    | 黄白色 | 小児 | Ⅲ  | K20より新しい      |
| 20 | 甕   | 634×809   | 淡褐色 | 甕   | 626×850    | 黄褐色 | 成人 | Ⅱ  | K19、21より古い    |
| 21 | 甕   | 298×370   | 淡褐色 | 甕   | 276×367    | 淡褐色 | 小児 | Ⅲ  | K20、D 3 より新しい |
| 22 | 甕   | 547×750   | 赤褐色 | 甕   | 518×722    | 淡褐色 | 成人 | Ⅱ  |               |
| 23 | 甕   | 510×635   | 黄褐色 | 甕   | 523×652    | 黄褐色 | 成人 | Ⅰ  | K14より古い       |
| 24 | 壺   |           |     | 甕   | 610×690    | 赤褐色 | 成人 | Ⅰ  |               |
| 25 | 傘蓋  | 632×349   | 赤褐色 | 甕   | 632×1005   | 黄褐色 | 成人 | Ⅳ  |               |
| 26 |     |           | 赤褐色 | 甕   |            |     | 成人 |    |               |
| 27 | 甕   | 638×859   | 黄白色 | 甕   | 640×875    | 黄白色 | 成人 | Ⅲ  | K13より新しい      |
| 28 | 甕   | 320×361   | 淡褐色 | 甕   | 316×353    | 黄褐色 | 小児 | Ⅳ  | D12より新しい      |
| 29 | 甕   | 593×858   | 黄褐色 | 甕   | 646×872    | 淡褐色 | 成人 | Ⅲ  | 下甕に穿孔(内→外)    |
| 30 | 甕   | 336×470   | 黄褐色 | 甕   | 412×488    | 淡褐色 | 小児 | Ⅴ  |               |

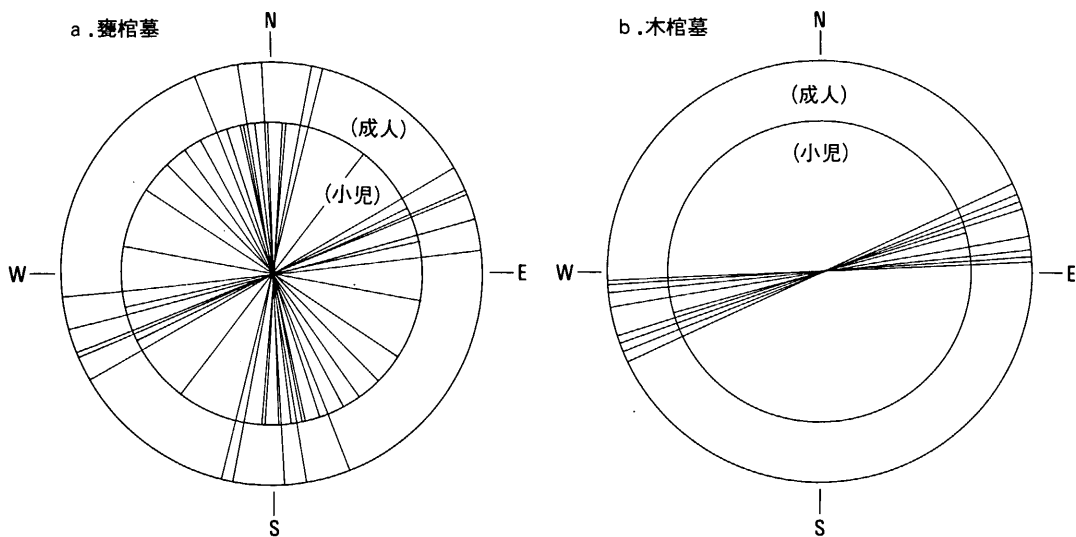
表2 修理田遺跡出土甕棺一覽

## Ⅳ ま と め

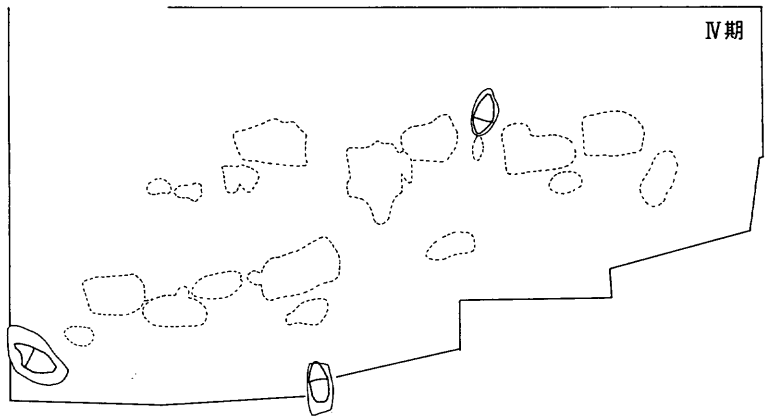
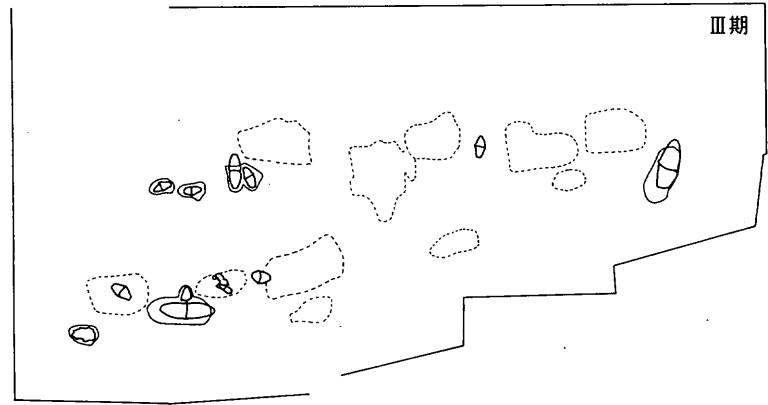
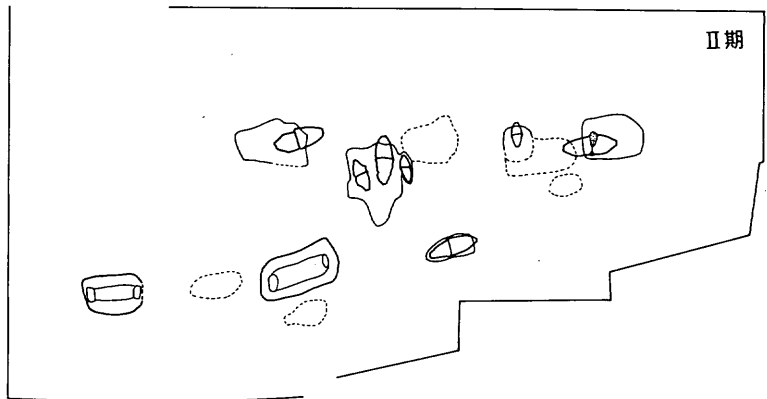
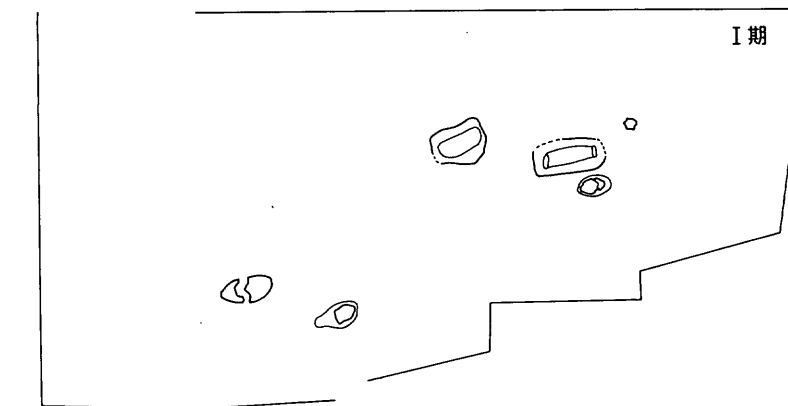
甕棺は成人用甕棺を4類、小児用甕棺を5類に分けることができた。これらの甕棺の時期は、成人用甕棺Ⅰ類・小児用甕棺Ⅰ類が前期末、小児用甕棺Ⅱ類が中期初頭（以上をⅠ期とする）、成人用甕棺Ⅱ類・小児用甕棺Ⅲ類が中期前葉前半（Ⅱ期）、成人用甕棺Ⅲ類・小児用甕棺Ⅳ類が中期前葉後半（Ⅲ期）、成人用甕棺Ⅳ類・小児用甕棺Ⅴ類（Ⅳ期）に比定されよう。しかし、今回の調査では墓地の全域を把握してはいないものの、中期初頭の時期が希薄であり、墓地の連続性を考えるならば、先にⅠ類とした甕棺の埋葬時期は中期初頭にまで下るものかもしれない。主軸方位は第28図に示すようにWSW-E NE（a群）、N-S（b群）と2分することができ、成人用甕棺に顕著な様相を示す。木棺墓からは遺物の出土をみず、時期を確定しえないが、甕棺との切り合い関係から、3・4号木棺墓は中期前葉前半以前、6・12号木棺墓は中期前葉後半以前のものである。主軸方位は第28図に示すように甕棺の主軸方位a群と同一方位を示す。これらの埋葬施設は密集部と空閑部がはっきりしており、WSW-E NEに延びる墓地を形成している。これを時期別にみてみると第29図のようになる。Ⅰ期においては、ややまとまりを欠く配置をとるが、主軸方位はいずれもa群に含まれる。<sup>(註1)</sup>Ⅱ期には、埋葬施設も増しⅠ期とほぼ同じ場所に埋置されている。主軸方位は、ほとんどがa群に含まれるが、新しくb群に含ま

| 時 期 | 前 期 末     | 中 期 初 頭 | 中 期 前 葉 |    | 中 期 中 頃 |
|-----|-----------|---------|---------|----|---------|
|     | Ⅰ 期       |         | Ⅱ期      | Ⅲ期 | Ⅳ 期     |
| 成 人 | Ⅰ 類 ~     |         | Ⅱ類      | Ⅲ類 | Ⅳ 類     |
| 小 児 | Ⅰ 類 ~ Ⅱ 類 |         | Ⅲ類      | Ⅳ類 | Ⅴ 類     |

表3 修理田遺跡出土甕棺時期区分表



第28図 甕棺墓・木棺墓主軸方位図



第29図 修理田遺跡時期別遺構配置図 (縮尺1/250)

れるものも出現する。Ⅲ期には、Ⅰ・Ⅱ期の西側に多く埋置され、東端にも1基が埋置されており、すでに埋置されているものへの意識がうかがえる。主軸方位についてはⅡ類と同じ様相を示す。Ⅱ・Ⅲ期が数的に最も多く、時期を確定しえない1・7・8号木棺墓を考え合わせると2例に近い配列をとっている。主軸方位も基本的に墓域の延びる方位と一致（a群）するが、墓域の方位と直角な方位（b群）をとるものが数例ある。Ⅳ期になると、このような統一性が失われ、散在する傾向がある。主軸方位はいずれもb群に含まれる。

Ⅱ・Ⅲ期と同時期の周辺遺跡には、本市内の永岡遺跡、那珂川町の門田遺跡、春日市の赤井手遺跡、福岡市の板付遺跡（第1区）、小郡市のハサコの宮遺跡、北牟田遺跡、夜須町の吹田遺跡などがあげられるが、いずれも密集部と空閑部の存在が認められ、埋葬施設が带状に走っている。特に永岡遺跡では、溝や竪穴で区画された部分内に、整然と2列に埋置されている。門田遺跡でも、墓域を区画する遺構は見られないものの、やはり2列に埋置され、吹田遺跡でも同様な配置をとっている。赤井手遺跡では、調査が墓域の一部に限られ、すでに人為的破壊もあるため明瞭ではないが、1例の埋置が認められ、北側に永岡遺跡と同種のものと思われる溝状遺構がある。以上はきわめて規則的な配置をとる遺跡であるが、本遺跡を含め他遺跡も、このように明瞭ではないが、規則的傾向が認められる。このような中期前における空閑を十分に用いない、一見、非合理的とも思える埋置状況は、葬制に対する何らかの規制、または制約によるものと思われるが、それが社会的なものであったか、階級的なものであったのかは、より検討を必要とする所である。そして、このような規則的な葬制をひくグループと規則的傾向の葬制をひくグループは一地域に混在しており、今後は相互の関係が注目される。

次にⅡ・Ⅲ期の墓地では、ほとんどの成人用埋置施設が墓地の延びる方位と同一方位を示すが、本遺跡20号・29号・(16号) 甕棺墓のように直角に埋置されるものが数例は存在するものである。このような甕棺で被葬者の性別がわかるものをあげてみると、永岡遺跡では13号甕棺—成年女性、14号甕棺—成年女性、門田遺跡では33号甕棺—熟年女性、47号甕棺—熟年女性、ハサコの宮遺跡では方位性がやや明瞭さを欠き、時期的にも若干古いものもあるため、資料として十分ではないが、1号甕棺—熟年女性、7号甕棺—熟年不明、18号甕棺—成年女性、19号甕棺—成年女性、20号甕棺—成年男性となっている。以上のようにハサコの宮遺跡20号甕棺を除き、いずれも女性であり、このような埋置方位の区別は女性に関する事柄が要因であると思われる。しかも、成人女性は墓地の延びる方向と同一方位をもつ甕棺にも葬られていることから、一部の女性、しかも大多数の甕棺の方位とは異なる方位をとり、共同体から疎外された意識がうかがえる。これらのことが何を示すものかは、いまだ明らかにしえないが、一つの可能性として、他共同体（集落）との間に外婚が行われた際、婚入者は死後、婚入先の墓地に埋葬されたが、本来の成員とは区別して埋置された、いわゆる出自規制の存在もありえよう。最後に本遺跡、20号甕棺と19・20号甕棺のように、成人用甕棺の上、または墓域を切って小児用甕



棺が埋置されている例であるが、この問題については血縁関係の存在が<sup>(註10)</sup>いわれている。この場合の成人用甕棺に葬むられた人の性別は、永岡遺跡で男性4例、女性7例、門田遺跡で男性1例、女性1例と女性に多い傾向はあるが、男性の例も稀ではなく、また前述した埋置方位が異なるものにもみられ（門田遺跡K47）、子供に対する特定の帰属権は、現在のところ埋葬からは見いだせない。筑紫野市周辺は近年、開発行為が増え、今年度も永岡遺跡の発掘調査（1977年調査地区の北側）を行った。開発は特に弥生時代遺跡の集中する平坦な丘陵を対象とすることが多く、弥生時代遺跡の減少は著しい。弥生文化の発生の地である北部九州に、弥生時代の生活を伝える遺跡が消滅しつつある現在、その保護は重要課題であり、小規模調査においても社会構成への認識は不可欠な問題である。

註1 木棺墓については甕棺との切り合い関係により上限がつかめるもののみを図示し、墓壙を切った甕棺より一時期古いものと仮定してあつかった。

註2 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第4集 1976、第5集 1977 福岡県教育委員会

註3 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第6集 1978 福岡県教育委員会

註4 赤井手遺跡 春日市文化財調査報告 第6集 1980 春日市教育委員会

註5 板付遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告 第35集 福岡市教育委員会

註6 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中巻 1976 福岡県教育委員会

註7 註6に同じ。

註8 夜須町吹田甕棺群遺跡 第3次調査 1969 埋もれていた朝倉文化 福岡県立朝倉高等学校史学部

註9 このほかにも佐賀県の四本黒木遺跡（「四本黒木遺跡発掘調査報告書」1977新郷土刊行会）や六本黒木遺跡（「大門西遺跡」佐賀県文化財調査報告第51集 1980 佐賀県教育委員会）などにもみられる。

註10 永岡遺跡の調査報告では、母親と子という血縁関係の可能性が述べられているが、成人用甕棺より小児用甕棺の方が後に埋置されている例がほとんどであり、このようなあり方は少なくとも同時死亡以外は考えられない。しかも永岡遺跡ではK38が5基、K28・33・36が2基と重複しており、同時死亡についても否定的である。以上のように成人女性と小児との組み合わせがすべて母親と子との血縁関係とは限らないと思われる。しかし、何らかの血縁関係の存在は十分考えられよう。

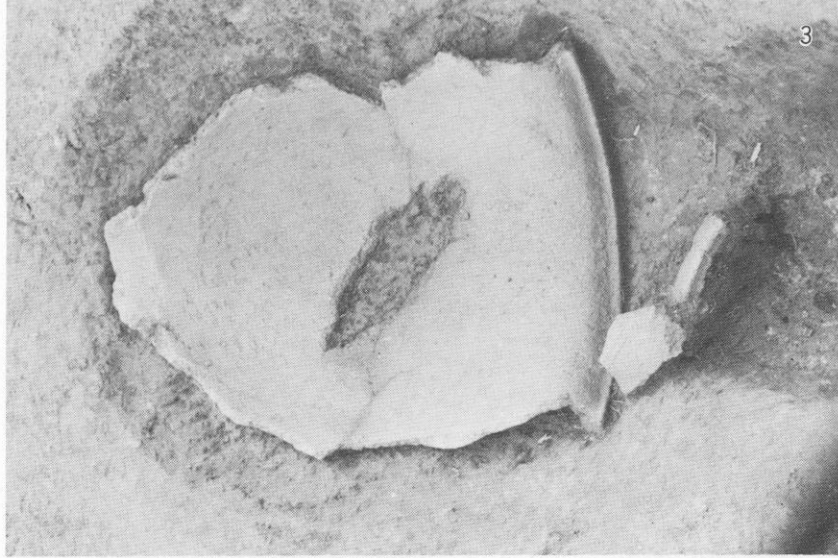
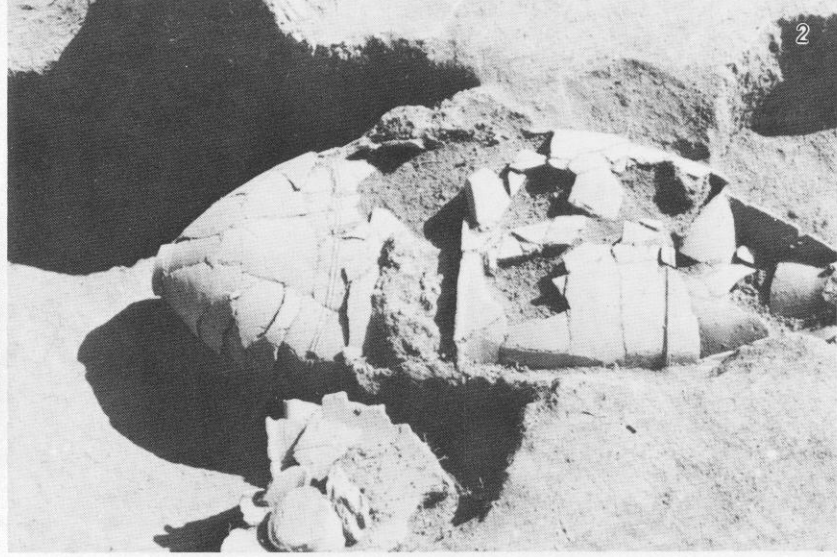
# 版 圖



(1) 遺跡の遠景 (東より)



(2) 遺跡の全景 (西より)

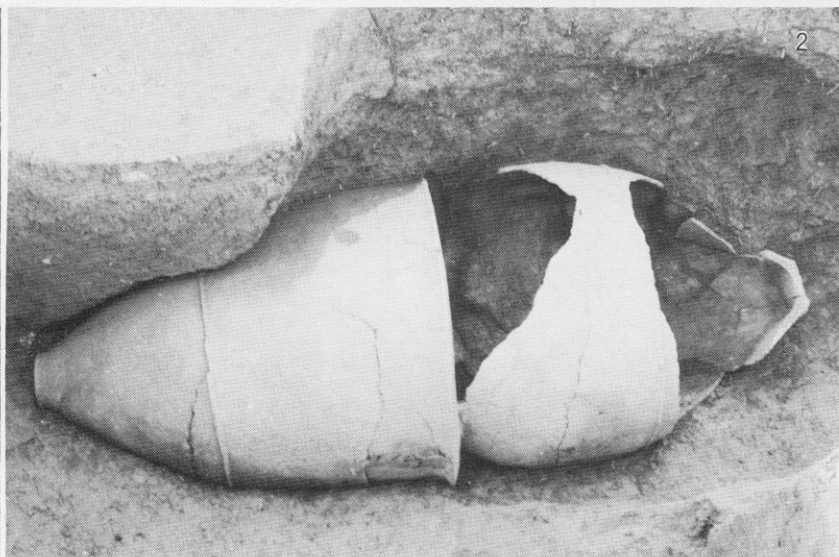
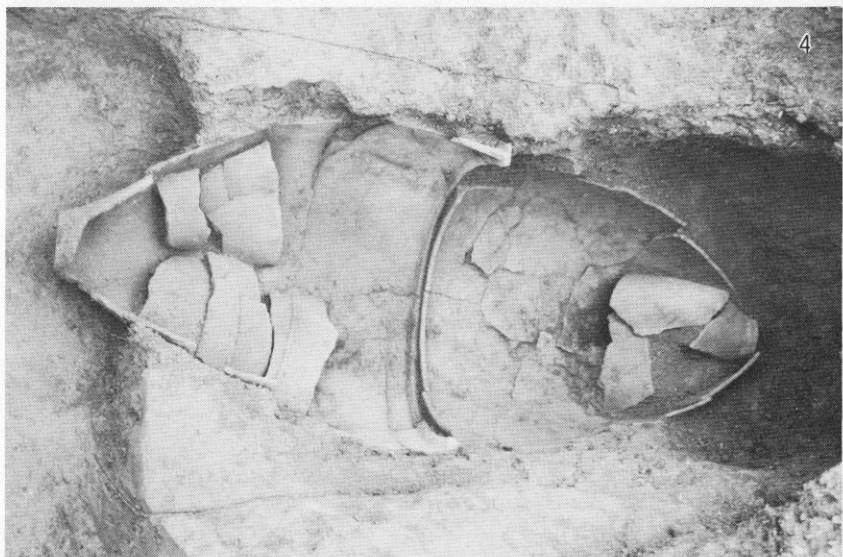


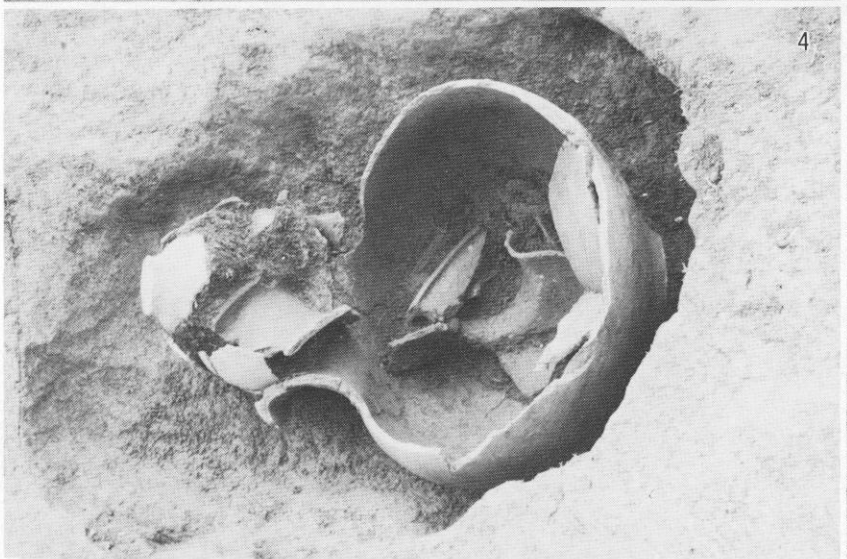
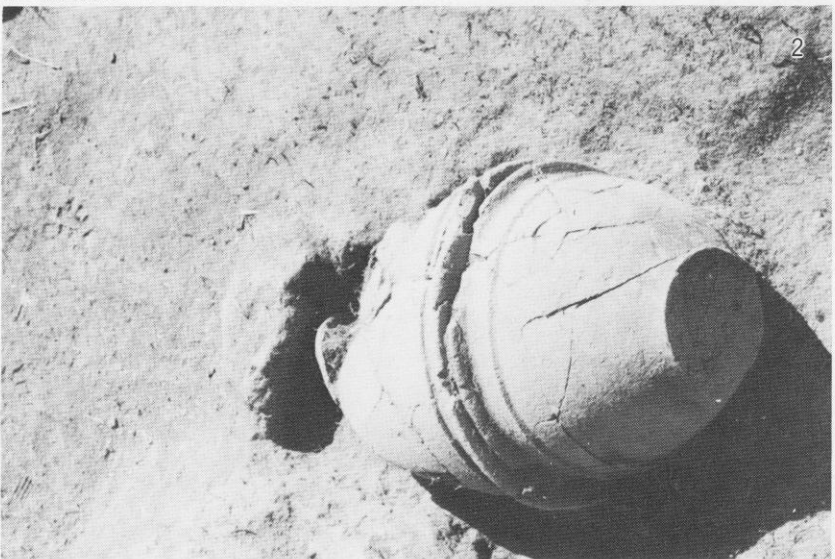
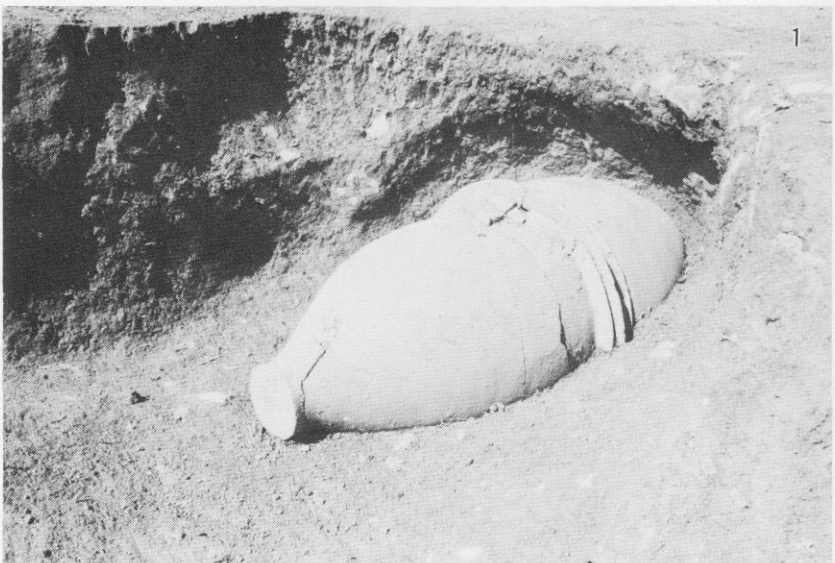
1、23号甕棺墓  
2、5号(上)8号(下)甕棺墓  
3、24号甕棺墓  
4、25号甕棺墓



3、1、  
29号甕棺墓

4、2、  
20号甕棺墓



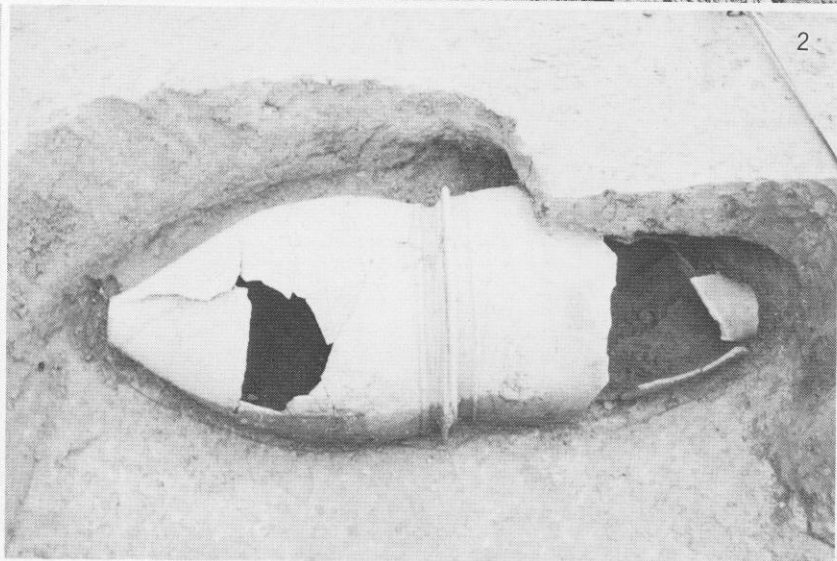
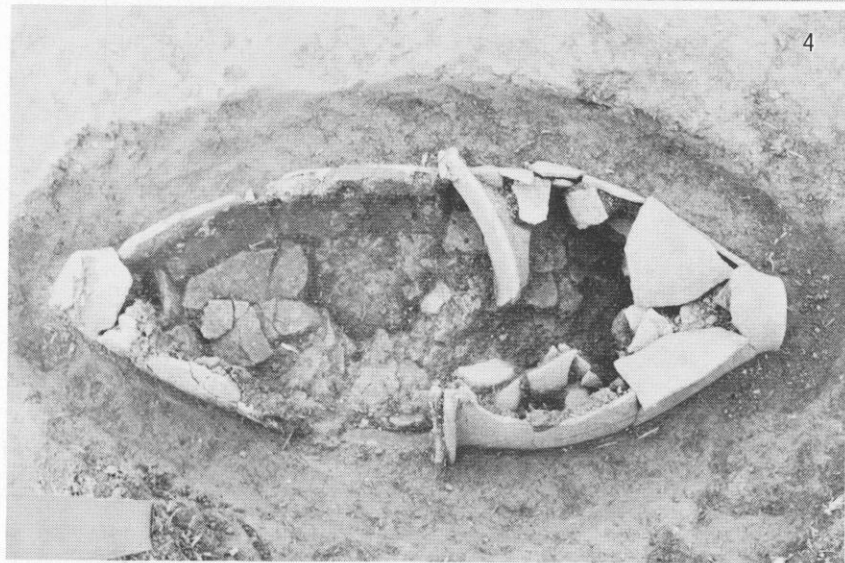
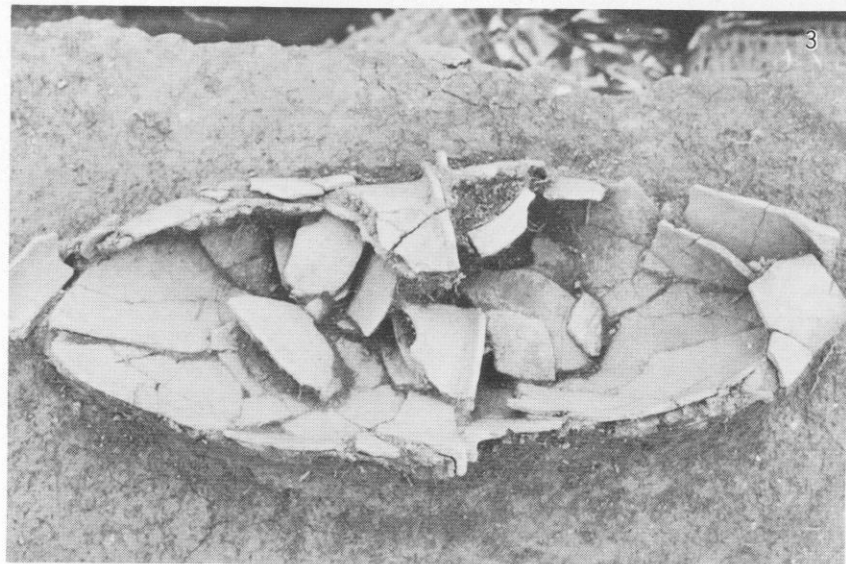


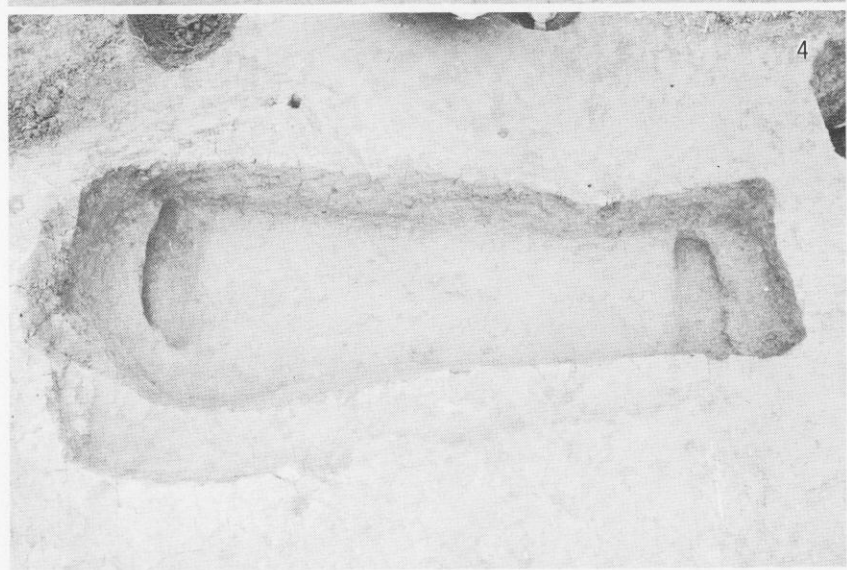
1、10号甕棺墓  
2、15号甕棺墓  
3、28号甕棺墓·12号木棺墓  
4、6号甕棺墓



3、1、  
21号甕棺墓

4、2、  
18号甕棺墓





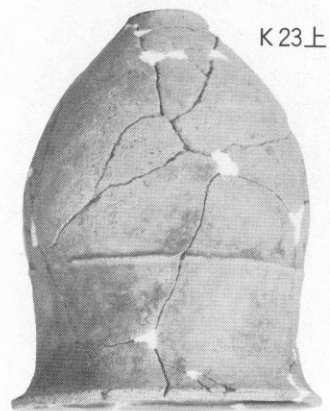
3、6号木棺墓

4、2号木棺墓

1、7号木棺墓

2、1号木棺墓





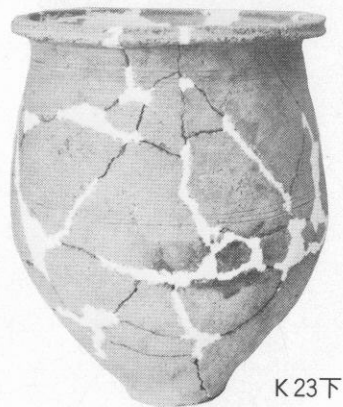
K23上



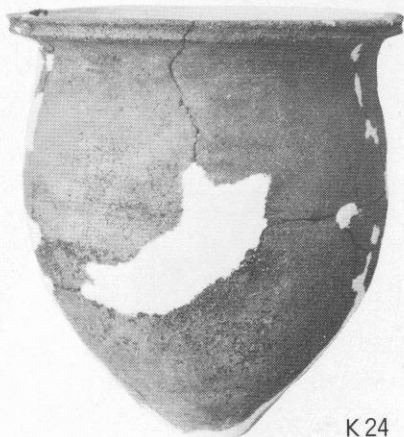
K17上



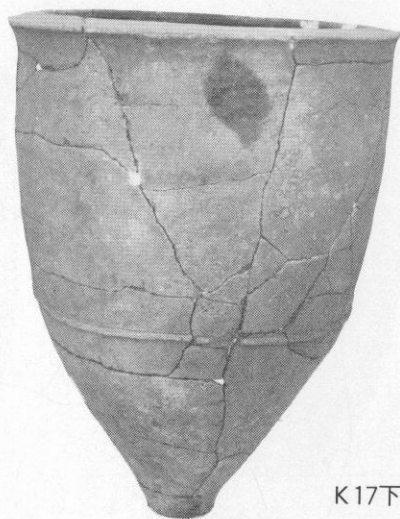
K20上



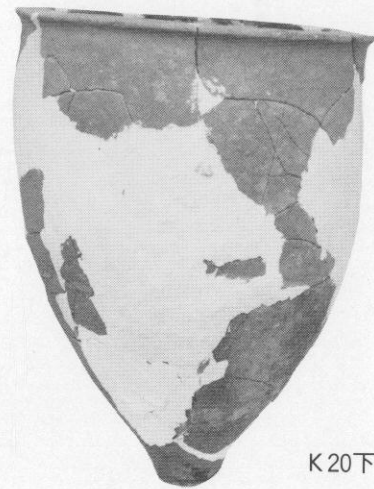
K23下



K24

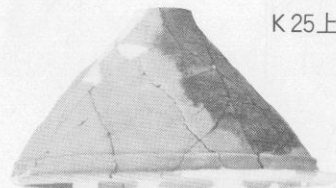


K17下

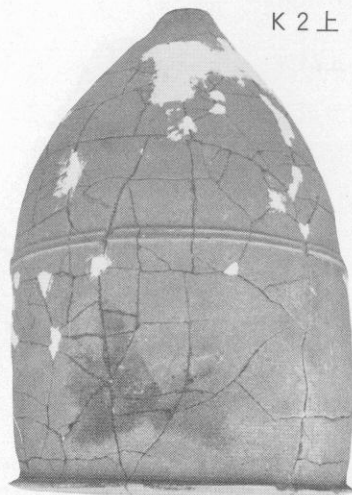


K20下

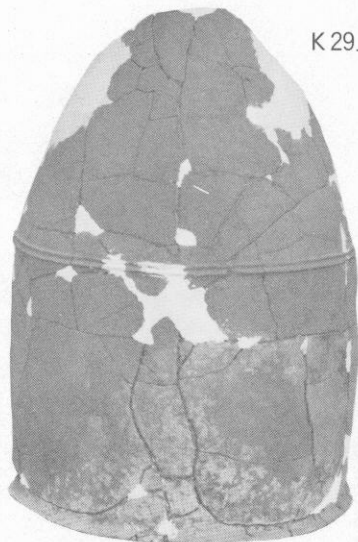
K 25 上



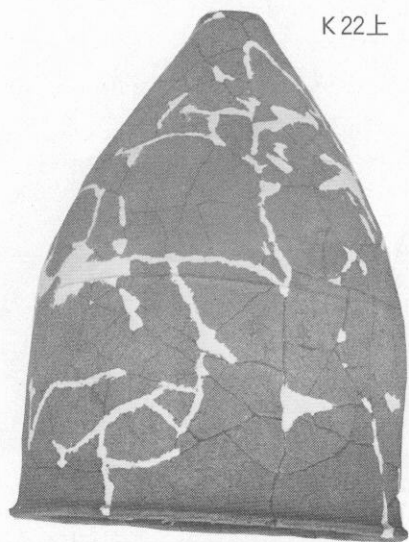
K 2 上



K 29 上



K 22 上



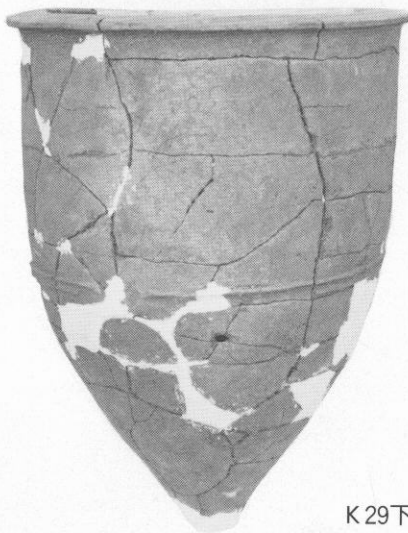
K 25 下



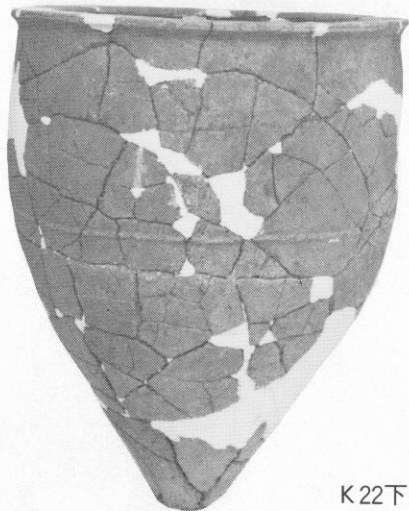
K 2 下



K 29 下

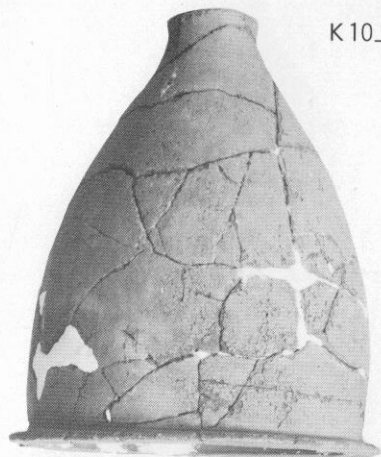


K 22 下

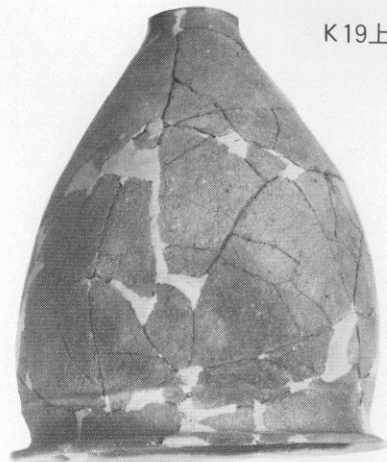




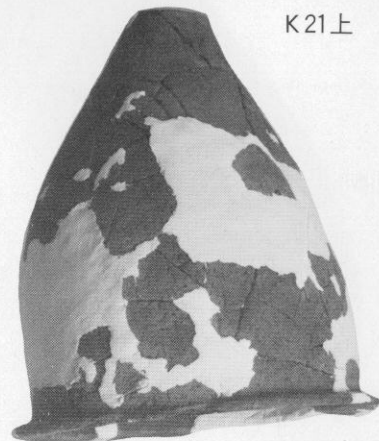
K 6 上



K 10 上



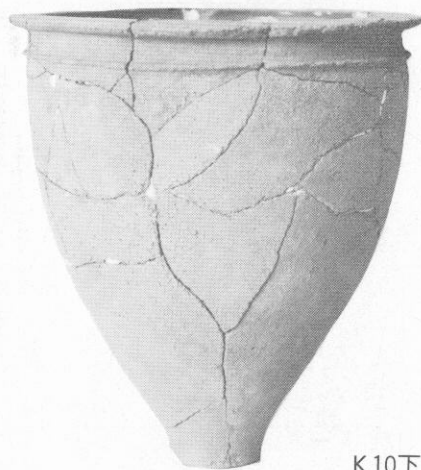
K 19 上



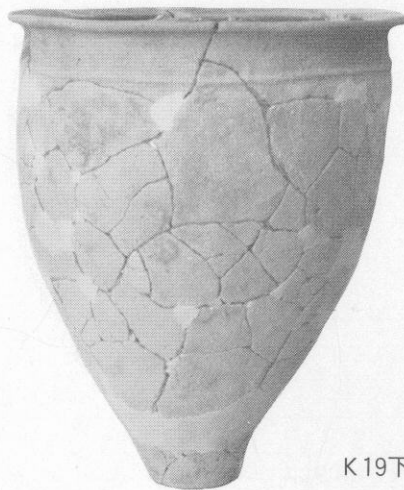
K 21 上



K 6 下



K 10 下

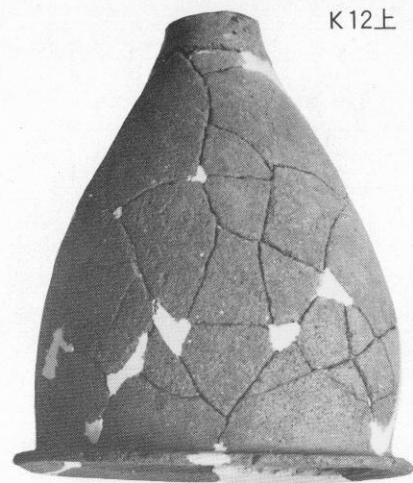


K 19 下

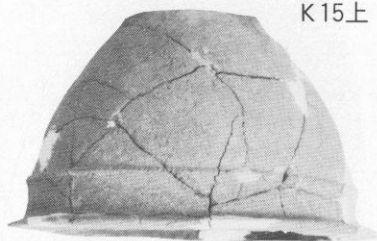


K 21 下





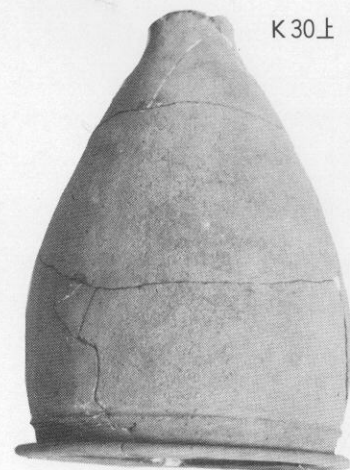
K12上



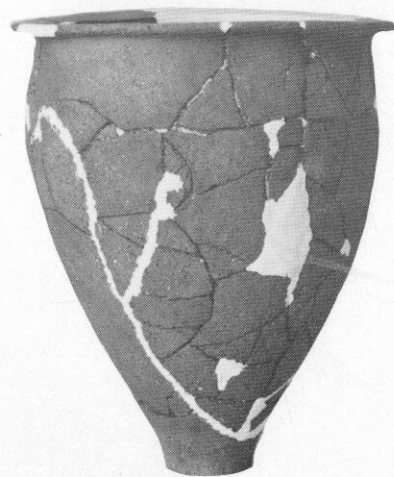
K15上



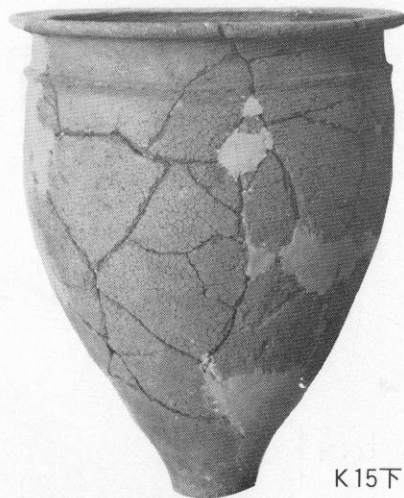
K16上



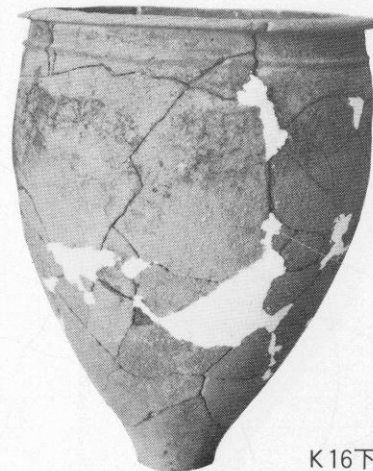
K30上



K12下



K15下



K16下



K30下

---

## 修理田遺跡

筑紫野市文化財調査報告書第5集

昭和55年12月15日

発行 筑紫野市教育委員会

筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

福岡市中央区天神5丁目5-15

---